

大日寺遺跡

2001年3月

河内長野市教育委員会
河内長野市遺跡調査会

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう街道の要衝として発展してきた街です。このため、市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした文化財や自然に対する影響は大きなものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は、開発と直接的に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、現在の、更には未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市においては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達の残したメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めて頂くと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用して頂ければ幸いです。

これらの発掘調査に協力して頂きました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に、末尾ながら謝意を表すものです。

平成13年3月

河内長野市教育委員会
教育長 福田弘行

例 言

1. 本報告書は平成5年度・12年度に河内長野市教育委員会及び河内長野市遺跡調査会が実施した大日寺遺跡（DNT93-1・00-1）の発掘調査報告書である。調査にかかる費用は、93-1については関西電力が、00-1については河内長野市が負担した。
2. 発掘調査はDNT93-1については河内長野市教育委員会教育部社会教育課主幹兼文化財保護係長尾谷雅彦・同係島羽正剛を担当者として実施した。DNT00-1については大谷女子大学教授中村浩を担当者として実施した。
3. 本書の執筆はDNT93-1については尾谷・藤原 哲（現（財）松江市教育文化振興事業団）が行い、DNT00-1については『大谷女子大学博物館報告書 第45冊 河内・大日寺』を再編集した。編集は中西和子（河内長野市立ふれあい考古館館長）が補佐した。
4. 発掘調査及び内業整理については、下記の方々の参加・協力を得た。（敬称略）
池田 武・池田千尋・大塚美幸・嘉悦真紀子・喜多順子・久保八重子・小森 光・杉本祐子・田川富子・中池佐和子・中尾智行（現（財）大阪文化財調査研究センター）・中村嘉彦・林 宏和・東田幸子・藤田徹也（河内長野市立ふれあい考古館）・桥本裕子・松尾和代・平田口京子・大谷女子大学文化財学科学生・大谷女子大学博物館課程履修学生
5. 発掘調査については、下記の方々の指導・協力を得た。記して感謝する。（順不同）
喜多町自治会・アジア航測株式会社・関西電力
6. 写真撮影はDNT03-1・遺構については鳥羽・林、遺物については中西が行った。DNT00-1については大谷女子大学が行った。
7. 本調査の記録はスライドフィルム等として保管しており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡 例

1. 本報告書に記載されている標高はTPを基準としている。
2. 土色については「新版標準土色帖」1990年度版による。
3. 平面測量基準は国家座標第VI系による5mメッシュを基準に実施したものである。
4. 図中の北は座標北である。
5. 本書の遺構名は下記の略記号を用いた。
S K…掘立柱建物 S D…溝 S K…上坑 S P…遺物出土ピット S W…石列
S X…落ち込み 不明 P…柱穴 N V…谷状地形
6. 遺構実測図の縮尺は1/20・1/30・1/40・1/50・1/60・1/80・1/100である。
7. 遺物実測図の縮尺は、土器・瓦1/4・石器2/3・銅鏡原寸を基準としているが、遺物の状況により変えている。
8. 遺物名は、土師質土器を土師質、瓦質土器を瓦質と略称し、器種名を付した。器種名については、本調査会の標記によるものとする。
9. 遺物の断面は、土師器・土師質土器・石製品は白抜き、須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器は黒塗り、瓦・金属製品は斜線である。
10. 文中の型式分類は、弥生土器は小林行雄・杉原莊介氏の弥生式土器集成、瓦器塊は尾上実氏の和泉型瓦器編の編年、土釜は首原正明氏の編年にもとづくものである。
11. 遺物番号と写真図版の番号は一致する。
12. 細部のため國化できなかった遺物は、器種名・遺物番号を省略し記していない。

目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章はじめ	3
第1節 位置と環境 (太田)	3
第2章 大日寺遺跡 (DNT 93-1)	9
第1節 概略 (尾谷)	9
第2節 調査の結果	10
1. 遺構 (尾谷)	10
2. 遺物 (藤原)	17
第3章 大日寺遺跡 (DNT 00-1)	19
第1節 調査にいたる経過 (太田)	19
第2節 調査の結果	20
1. 概略 (中村)	20
2. 屋序 (中村)	21
3. 遺構 (中村)	21
4. 遺物 (藤沢)	33
第3節 まとめ (藤沢)	55
1. 検出遺構から見た大日寺遺跡の変遷	55
2. 出土遺物から見た大日寺遺跡について	58
3. 大日寺と高野街道・鳥帽子形城	63

挿 図 目 次

第1図 河内長野市遺跡分布図 (1/40000)	1
第2図 遺跡位置図	3
DNT 93-1	
第3図 調査区位置図 (1/5000)	9
第4図 遺構配置図 (1/100)	10

第5図	調査区土層断面図 (1/60)	11
第6図	S B 1 遺構実測図 (1/60)	12
第7図	S D 1 遺構断面実測図 (1/40)	12
第8図	S K 1・2 遺構断面実測図 (1/40)	13
第9図	S K 3 遺構断面実測図 (1/40)	13
第10図	S K 4 遺構断面実測図 (1/40)	13
第11図	S K 1・3・5・7 出土遺物実測図	13
第12図	S K 6 遺構断面実測図 (1/40)	14
第13図	S K 7 遺構実測図 (1/30)	14
第14図	S X 1 遺構実測図 (1/30)	15
第15図	S X 2・3 遺構断面実測図 (1/40)	15
第16図	S X 5 遺構実測図 (1/30)	15
第17図	S X 1・3～5 出土遺物実測図	15
第18図	包含層出土遺物実測図	17

D N T 00- 1

第19図	調査区位置図 (1/5000)	19
第20図	遺構配置図 (1/100)	20
第21図	調査区土層断面図 (1/40)	22
第22図	S B 1 遺構実測図 (1/50)	23
第23図	S B 2 出土遺物実測図	23
第24図	S B 2 遺構実測図 (1/100)	24
第25図	S B 3・4 遺構実測図 (1/80)	24
第26図	S B 4 出土遺物実測図	25
第27図	S D 1 出土遺物実測図	25
第28図	S D 1・S F 1・S X 1 遺構実測図 (1/100)	25
第29図	S E 1 遺構実測図 (1/50)	26
第30図	S K 2 遺構実測図 (1/50)	27
第31図	S K 2 出土遺物実測図	27
第32図	S K 3 出土遺物実測図	27
第33図	S K 3・5 遺構実測図 (1/50)	28
第34図	S K 4 遺構実測図 (1/50)	28
第35図	S K 4 出土遺物実測図	29
第36図	S K 5 出土遺物実測図	29
第37図	S K 6 出土遺物実測図	30
第38図	S X 1 出土遺物実測図 (1)	31

第39図	S X 1 出土遺物実測図（2）	32
第40図	軒丸瓦 1 類実測図	35
第41図	軒丸瓦 2 類実測図	35
第42図	軒丸瓦 3 類実測図	36
第43図	軒丸瓦 4 類実測図	37
第44図	軒丸瓦 5 類実測図	37
第45図	軒丸瓦 6 類実測図	38
第46図	軒丸瓦 7 類実測図	38
第47図	軒丸瓦 8 類実測図	38
第48図	軒丸瓦 9 類実測図	39
第49図	軒平瓦 1 類実測図	39
第50図	軒平瓦 2 類実測図	40
第51図	軒平瓦 3 類実測図	40
第52図	軒平瓦 4 類実測図	41
第53図	軒平瓦 5 類実測図	41
第54図	軒平瓦 6 類実測図	42
第55図	軒平瓦 7 類実測図	42
第56図	丸瓦 1 類実測図	43
第57図	丸瓦 2 類実測図	43
第58図	丸瓦 3 類実測図	44
第59図	丸瓦 4 類実測図	44
第60図	丸瓦 5 類実測図	44
第61図	丸瓦 6 類実測図	45
第62図	丸瓦 7 類実測図	45
第63図	平瓦 1 類実測図	45
第64図	平瓦 2 類実測図	46
第65図	平瓦 3 類実測図	47
第66図	平瓦 4 類実測図	47
第67図	平瓦 5 類実測図	47
第68図	平瓦 6 類実測図	48
第69図	平瓦 7 類実測図	48
第70図	雁振瓦 1・2 類実測図	49
第71図	埠 1 類実測図	49
第72図	埠 2 類実測図	49
第73図	鬼瓦実測図	50

表 目 次

第1表 河内長野市遺跡地名表	2
第2表 遺物出土遺構一覧表	33

図 版 目 次

図版1 DNT93-1 調査区全景（西から）・（北から）	
図版2 DNT93-1 SK7 遺物出土状況（南から）、SX1（北から）	
図版3 DNT93-1 遺物 SK1（5）、SK7（1・3・4）、SX1（10~15）、 包含層（21~31・33）	
図版4 DNT00-1 調査地（北東から）・（南西から）	
図版5 DNT00-1 遺構検出状況（北から）・調査地全景（北から）	
図版6 DNT00-1 東壁土層（北部分）・（南部分）	
図版7 DNT00-1 南壁土層（東部分）・（西部分）	
図版8 DNT00-1 調査区北部分（西から）・調査区南部分（西から）	
図版9 DNT00-1 SB1（南から）・（東から）	
図版10 DNT00-1 SE1（東から）、SK2（西から）	
図版11 DNT00-1 SK4（西から）、SK6（西から）	
図版12 DNT00-1 SX1（東から）、SX1 東拡張部（西から）	
図版13 DNT00-1 SX1 遺物出土状況（北から）、埠出土状況	
図版14 DNT00-1 SX1 遺物出土状況（北から）、瓦出土状況	
図版15 DNT00-1 遺物 SB4（38）、SX1（55・58・62・68・74・79・83・85・97）	
図版15 DNT00-1 遺物 SB4（38）、SX1（55・58・62・68・74・79・83・85・97）	
図版16 DNT00-1 遺物 SX1（118・120・121・133）	
図版17 DNT00-1 遺物 SB2（37）、SK2（40）、SK4（44・47・48）、 SK6（54）、SX1（140）	
図版18 DNT00-1 遺物 SX1（142~144）	
図版19 DNT00-1 遺物 SB2-P1（150）、SK6（148）、SX1（146・147・ 154~156）	
図版20 DNT00-1 遺物 SB2-P2（165・172）、SB4（169）、SK6（174）、 SP1（164）、SX1（161）	
図版21 DNT00-1 遺物 SD1（197）、SK6（193）、SX1（187・188・190・ 196・199）	
図版22 DNT00-1 遺物 SD1（205）、SK3（208・209）、SK6（203）、SX1（206）	



第1図 河内長野市遺跡分布図 (1/40000)

番号	文化財名稱	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降
3	觀心寺遺跡	社寺	平安以降
4	大御山古墳	古墳？	吉墳（前期）
5	大御山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大御山遺跡	集落・生產	弥生（後期）・平安
7	佛寺遺跡	社寺	中世以降
8	鳥居子穴八幡神社遺跡	社寺	室町以降
9	冢古墳	古墳	古墳（後期）・近世
10	長池寺遺跡	社寺	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	龍寺寺遺跡	社寺	平安以降
14	天野山金剛寺遺跡	社寺	墳墓
15	日野觀音寺遺跡	社寺	平安～中世
16	地藏寺遺跡	社寺	中世以降
(17)	別湧寺遺跡	社寺	平安以降
18	五木木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	石器	後石器～中世
20	鳥居子形埴輪	埴輪	平安～近世
21	高多町遺跡	集落	繩文・古墳～中世
22	鳥居子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯	窯	中世
24	塙谷遺跡	散布地	繩文～近世
25	尾谷八幡神社	社寺	平安以降
26	蟹井湖南遺跡	散布地	中世
27	蟹井湖北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早駅南遺跡	社寺	中世
30	岩瀬東郷寺遺跡	社寺	中世以降
31	清永水道跡	散布地	中世
32	伝「仲哀帝」古墳	古墳？	近世
(33)	笠村池原墓	社寺	近世
(34)	鹿櫻埋	墳墓	近世
(35)	中村阿波堂跡	社寺	近世
(36)	東の村首堂跡	社寺	近世
(37)	西の村首堂跡	社寺	近世
38	清水阿波院堂跡	社寺	近世
39	鹿尻郡勤廟跡	社寺	近世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳	古墳
42	宮山遺跡	集落	繩文・奈良
43	西代藩陣屋跡	散布地・城跡	飛鳥～奈良・江戸
44	上原町墓地	墳墓	近世
45	惣持寺跡	散布地・井名	繩文・奈良・鎌倉
46	蓬山山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ヶ池遺跡	散布地	繩文
48	上原遺跡	散布地	后石器～近世
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降
52	膳所蘿代官房跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	雙子瓦窯跡	散布地	社寺
55	河内守城跡	城館	中世
56	三日市遺跡	集落・古墳地	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	中世
58	高木城跡	散布地	繩文
59	汐の山城跡	城館	中世
60	峰山城跡	城館	中世
61	船荷山城跡	城館	中世
62	國見城跡	城館	中世
63	旗城跡	城館	中世
64	樺栗城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降
(66)	葛城第15統跡	経塚	平安以降
67	加賀山神社遺跡	社寺	中世以降
68	庚申堂遺跡	社寺	近世以降
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐直城跡	城館	中世
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16統跡	経塚	平安以降

番号	文化財名稱	種類	時代
(73)	葛城第18統跡	経塚	平安以降
(74)	葛城第19統跡	経塚	平安以降
(75)	莊尾	城跡	中世
(76)	大沢	城跡	中世
(77)	三國山経塚	経塚	平安以降
(78)	光浦寺遺跡	社寺	中世以降
(79)	猿子城	城跡	中世
80	蟹井源神社遺跡	社寺	中世以降
(81)	川上神社遺跡	社寺	中世以降
82	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
83	向野遺跡	集落・生產	縄文・平仮～近世
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	弥生～中世
86	大日寺遺跡	寺塔・古墳・塁壁	弥生～中世
87	高岡南遺跡	散布地	繩文
88	小堀遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塙遺跡	集落	古墳（後期）
90	原崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	タコラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世丸窯	生産	近世
96	古町東遺跡	散布地	弥生～中世
97	上田町窯跡	生産	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
99	西之山遺跡	散布地	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚遺跡	墳墓	中世
(105)	葛城第17統跡	経塚	平安以降
106	美園町塁跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	生産	中世
108	寺元遺跡	集落・社寺	奈良・中世
(109)	尾原遺跡	散布地	中世
110	法師原古墳跡	古墳	古墳
111	上山謫居山古墳跡	古墳	古墳
112	西諸遺跡	集落	古墳・中世・近世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	古の下遺跡	集落	平安・中世
115	柴町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
116	鍋町遺跡	散布地	中世
(117)	牛井遺跡	散布地	繩文・中世
118	鍋町北遺跡	集落	弥生・中世・近世
119	市町西遺跡	集落	繩文・中世
120	柴町南遺跡	集落	中世
121	柴町東遺跡	散布地	弥生
122	楠町東遺跡	散布地	弥生
123	沙の宮町東遺跡	散布地	弥生・奈良
124	沙の宮町遺跡	散布地	中世
125	神方町近世墓	墳墓	中世
126	増福寺跡	社寺	中世以降
127	三昧城遺跡	城跡	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
130	東高野街遺跡	街道	平安以降
131	西高野街遺跡	街道	平安以降
132	高野街遺跡	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
134	地蔵寺東方遺跡	墳墓	縄文
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかし町遺跡	散布地	近世
138	岩瀬北遺跡	集落	中世
139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世
140	昭栄町東遺跡	散布地・油跡	縄文・中世・近世
141	三日市北遺跡	集落	弥生・中世
142	三日市宿跡	前駆に立つ商店	中世・近世
143	上田町宿跡	前駆に立つ商店	中世・近世
144	庵民遺跡	散布地	縄文・古代・中世

() は地図範囲外 * は街道につき地図上にプロットせず

第1章 はじめに

第1節 位置と環境

1. 位置

大日寺遺跡は河内長野市の北部に位置する喜多町に所在する。地理的環境については標高182mの烏帽子形山から北東に向かって派生する尾根上地形に立地している点があげられる。巨視的に見ると烏帽子形山は河岸段丘及び沖積地に囲まれた独立丘陵となっている。これらは北側を除く三方が丘陵によって囲まれており、東に金剛山地、西に小山田丘陵、南に和泉山脈が位置する。

烏帽子形山は大阪層群によって構成され、基盤層には粘土層、砂礫層が交互に認められる。当該遺跡が立地する地山も粘土層、砂礫層が交互に繰り返される。烏帽子形山の西方2kmの地点に位置する小山田丘陵もまた大阪層群によって構成されている。一方、烏帽子形山の東2kmに広がる金剛山東斜面は花崗岩の岩盤よりなる。この小山田丘陵、金剛山と烏帽子形山の間にはそれぞれ河川と河川によって形成された河岸段丘、及び沖積地が広がっている。これら二つの河川は東側を貫流するのが天見川であり、天見川の支流に加賀田川、石見川がある。西を貫流するのが石川である。これら2つの河川は当該遺跡の北で合流する。市内の遺跡の多くはこれらの河川及びこれらの支流によって形成された低・中位段丘及び沖積地の上に立地している。以下には合流した後の石川流域を市内北部とし、市内南部と区別して記述を行いたい。

2. 歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、石川流域に高向遺跡・上原遺跡・天見川流域に三日市遺跡が所在しており、小山田丘陵には寺ヶ池遺跡が所在している。三日市遺跡では181点のほる剥片、石核、石器が出土している。石器ではナイフ形石器、尖頭器、削器、楔形石器が出土している。高向遺跡ではナイフ形石器、有舌尖頭器が出土しており、寺ヶ池遺跡では有舌尖頭器が表採されている。^{註1}

縄文時代には遺跡の数は増加する。縄文時代早期・前期の遺跡は旧石器時代の遺跡と重



第2図 遺跡位置図

なる例が多く、三日市遺跡では縄文時代早期の梢円形押型文が施された高山寺式土器が、高向遺跡ではC字形やD字形の爪形文が施された縄文時代前期の北白川下層式の土器が出土している^{注3}。また、三日市遺跡から見て天見川の対岸に位置する小塙遺跡では梢円形押型文が施された縄文時代前期の土器が出土しており、市内北部に位置する塙谷遺跡では縄文時代早期の石器が出土している^{注4}。縄文時代中期の遺跡では先述の三日市遺跡や石川流域に位置する宮山遺跡で北白川C式土器が出土している^{注5}。縄文時代中期の遺構は三日市遺跡で2基の上坑が、宮山遺跡で竪穴住居が検出されている^{注6}。縄文時代後晩期には三日市遺跡で中津式土器、滋賀里Ⅲ式土器、船橋式土器が出土しており、石川流域の向野遺跡、喜多町遺跡でも縄文時代後期と見られる土器が出土している^{注7}。この他にも菱子尻遺跡では縄文時代の石器が出土しており、寺ヶ池遺跡では縄文時代の石器が表採されている。

弥生時代は拠点集落と呼ばれる大規模な環濠集落を中心に土地開発が進む時代であるが、本市ではまだこのような拠点集落は発見されていない。当該遺跡南東の石見川流域の低・中位段丘上に三日市遺跡が、市内北部の石川流域の低中位段丘上には汐ノ宮町南遺跡、市町東遺跡が立地している。これらの集落遺跡はいずれも短期間で廃絶する中小規模の集落である。弥生時代でも後期になると高地性集落が出現し、当該遺跡南東1kmの地点には大師山遺跡が所在している。大師山遺跡では住居跡、溝、土坑が検出されている^{注8}。また当該遺跡からも平成8年度の調査において弥生時代中期の溝が検出されている^{注9}。

古墳時代前期には全長50mの前方後円墳である大師山古墳が出現する。大師山古墳は天見川と右見川が合流する地点の東側の丘陵上に位置する。当該地域の地域首長墓と考えられる。大師山古墳は戦前と戦後の2度にわたって発掘調査が行われており、内行花文鏡1面、管玉8個、鉄形石1個、車輪石22個、石鈴17個、紡錘車4個、鉄器片2個、埴輪が出土している。主体部は粘土郭であったと推定されている^{注10}。石川流域には大師山古墳と同時期に、ほぼ同規模の前方後円墳が複数存在しており、下流から羽曳野市御旅所古墳、富田林市真名井古墳などが見られる。なお市内ではこれに続く首長墓の系譜は見出せない。古墳時代前期の集落遺跡としては三日市遺跡があり、竪穴住居6棟、土壙墓2基が検出されている^{注11}。古墳時代中期に入ても市内には首長墓と考えられる大型の古墳は確認されていない。市内で確認されている中期古墳は方形低墳丘墳であり、先述の三日市遺跡から3基の古墳が検出されている^{注12}。このような状況は古市古墳群を除く、石川流域全体に見られる現象であり、他市においても中期の前方後円墳はほとんど例を見ない。なお市北部に隣接する富田林地域には、寛弘寺古墳群中に小規模の中期古墳が存在している。古墳時代中期の集落は三日市遺跡で先述の古墳群に隣接して検出されており、竪穴住居8棟と掘立柱建物2棟が検出されている^{注13}。古墳時代後期には全国的に各地で横穴式石室を埋葬施設とする後期群集墳が出現するが、市内では三日市遺跡で検出された三日市古墳群が群集墳として位置付けることが可能である。また、当該遺跡から北方約800mには五ノ木古墳、双子塚古墳、法師塚古墳が分布している。これらは群集の度合いが弱く、後期群集墳と呼ぶに

は躊躇される。また、西方約500mには烏帽子形古墳がやはり単独で存在している。当該古墳も含めて古墳が散漫に分布する状況にあったのだろう。市域外では当該遺跡の北西3.5kmの地点に富田林市の嶽山古墳群・田中古墳群が立地している。当該時期に集落はそれまでの低位段丘上から高位段丘上にも拡大したようであり、三日市遺跡の他に新たに小塙遺跡、加塙遺跡、尾崎北遺跡、西浦遺跡が市内南部の加賀田川の中位・高位段丘上に出現する。また、当該遺跡の南方約500mの地点には喜多町遺跡があり、古墳時代後期の堅穴住居が検出されている。²¹⁹

古代には加賀田川流域の河岸段丘上の小塙遺跡・尾崎遺跡、天見川流域の河岸段丘上の三日市遺跡、烏帽子形山の東山麓に位置する喜多町遺跡などの古墳時代後期に出現した集落が古代においても断続的に営まれるほか、新たに、石川流域で高向遺跡・野間里遺跡などが成立する。市内北部の石川流域においても、向野遺跡で集落が出現する。また、このような集落遺跡の他に小山田丘陵では火葬墓が検出されており、²²⁰ 小山田丘陵の長池窯跡群、²²¹ 石川流域の日野観音寺遺跡、²²² 石見川流域の寺元遺跡では炭焼窯が検出されている。

中世には市内の遺跡は急増し、市内の大部分の遺跡で何らかの中世の遺構・遺物の検出を見ている。これは高野街道の発展と金剛寺、観心寺の中興が大きく影響していると思われる。また、高野街道沿いの集落や寺院では、貿易陶磁が集中的に出土している。

集落遺跡では三日市遺跡、高向遺跡、尾崎遺跡、上原北遺跡、向野遺跡、野作遺跡、市町西遺跡の調査で比較的広い面積からまとまった量の遺構が検出されている。このうち三日市遺跡では当時の集落と墓地が検出されており、²²³ 同様の状況は当該遺跡でも見ることができる。また、向野遺跡、野作遺跡、上原北遺跡では、集落遺跡に生産活動の一部を示す遺構・遺物が検出されている。向野遺跡や野作遺跡はフイゴの羽口、鉄滓、鋳型の破片が検出されており、²²⁴ 鑄物、鍛冶関係の工房跡と見られている。また上原北遺跡では炭焼窯群と建物群が近接した場所から検出されている。

城郭では烏帽子形城跡が発掘調査されている。主郭に相当すると考えられる郭から瓦葺建物が検出されており、土師質皿、瀬戸美濃の天目茶碗、瓦が出土している。

寺院関連の遺跡では天野山金剛寺遺跡、観心寺遺跡、岩瀬薬師寺跡の調査でまとまった成果があげられている。観心寺は石見川流域に位置する。現在までに窯、谷状地形、石垣、杭列等を検出しており、谷状地形からは平安時代～鎌倉時代にかけての遺物が出土している。²²⁵ また近年の調査では近世の遺構群も検出されている。²²⁶ 市内南部の天野山金剛寺ではこれまでに調査の機会が多く、建物跡、中世墓群、井戸、土釜理納遺構等が検出されており、主に13世紀以降の遺物が出土している。出土遺物には土師皿、瓦器、瓦質土器といった日常雜器に加えて、備前、常滑、瀬戸などの遠隔地で生産された国産陶磁器や国外で生産された貿易陶磁を含んでおり、中世の活発な流通活動を窺い知ることができる。市内南部の天見川上流域に位置する千早口駅南遺跡からは石組み、建物跡、溝、土坑等が検出されており、一般集落からは検出例の乏しい、仏具や貿易陶磁が出土しており、大量の古瓦も出

上している。出土した軒丸瓦には巴文軒丸瓦に加えて複弁蓮華文軒丸瓦が含まれていた。
このような事から、千早口駅南遺跡は岩瀬薬師寺の遺構と判断されている。

(太田)

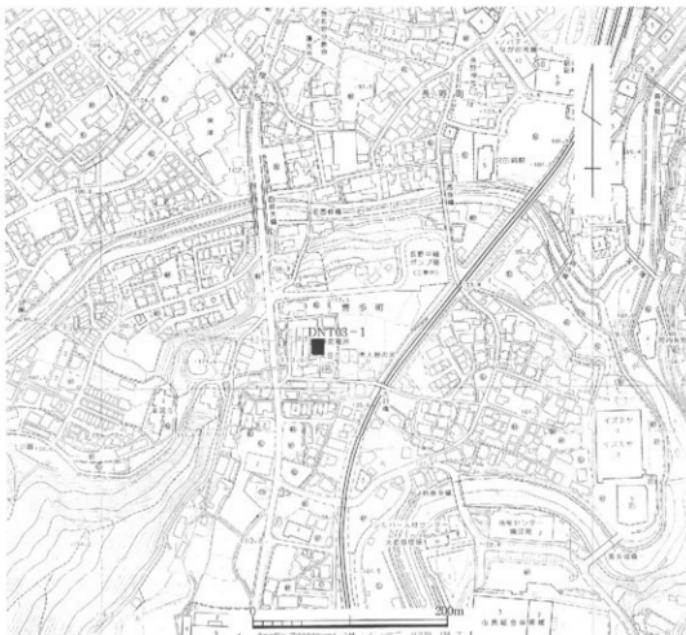
註・参考文献

- 註1 (財)大阪府埋蔵文化財協会『高向遺跡』 (財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第40輯 1989
- 註2 三日市遺跡調査会『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1988
- 註3 註1と同じ
- 註4 河内長野市教育委員会『河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』1993
- 註5 河内長野市役所『河内長野市史 第1巻(上)本文編 考古』平成6年
- 註6 河内長野市教育委員会『河内長野市埋蔵文化財調査報告書XVI』1998
- 註7 註2と同じ
- 註8 註6と同じ
- 註9 註2と同じ
- 註10 河内長野市遺跡調査会『向野遺跡』 河内長野市遺跡調査会報V 1993
- 註11 河内長野市遺跡調査会 河内長野市遺跡調査会報II 1990
- 註12 河内長野市遺跡調査会 河内長野市遺跡調査会報XIII 1996
- 註13 関西大学文学部考古学研究室『大御山 河内長野』<関西大学文学部考古学研究>1977
- 註14 河内長野市教育委員会『河内長野市埋蔵文化財調査報告書XIII』1997
- 註15 註13と同じ
- 註16 註2と同じ
- 註17 註2と同じ
- 註18 註2と同じ
- 註19 河内長野市遺跡調査会 河内長野市遺跡調査会報I 1989
- 註20 狩山町市編纂委員会『狩山町史』1966
- 註21 河内長野市教育委員会『棚原窯跡発掘調査概要』1976
- 註22 河内長野市教育委員会『河内長野市埋蔵文化財調査報告書II』1988
- 註23 河内長野市遺跡調査会『河内長野市遺跡調査会報XI 寺元遺跡』 1995
- 註24 三日市遺跡調査会『三日市遺跡調査報告書II』1988
- 註25 註10と同じ
- 註26 河内長野市教育委員会『野作遺跡』河内長野市文化財調査報告書XXII 1992
- 註27 河内長野市遺跡調査会『河内長野市遺跡調査会報II』 1993
- 註28 河内長野市教育委員会『三日市遺跡・觀心寺遺跡』河内長野市文化財調査報告書X 1994
- 註29 河内長野市教育委員会『河内長野市埋蔵文化財調査報告書XVI 本多町北遺跡、下早町遺跡、西代藩陣屋跡、三日市遺跡、市町東遺跡、加塙遺跡』2000

- 註30 河内長野市遺跡調査会 『河内長野市遺跡調査会報VI 金剛寺遺跡』 1993
河内長野市遺跡調査会 『河内長野市遺跡調査会報XIII 天野山金剛寺遺跡』 1994
- 註31 河内長野市遺跡調査会 『河内長野市遺跡調査会報IV』 1992

第2章 大日寺遺跡 (DNT93-1)

第1節 概略



第3図 調査区位置図 (1/5000)

大日寺遺跡は河内長野市喜多町に所在する社寺遺跡である。遺跡の立地は、標高181.8mの鳥帽子形山から北東に派生する尾根が標高を下げて、石川に向かって広がる段丘上に位置する。

この鳥帽子形山の山頂には山城の鳥帽子形城の縄張りが残されている。また東側山麓には重要文化財の本殿を持つ鳥帽子形八幡神社が鎮座している。

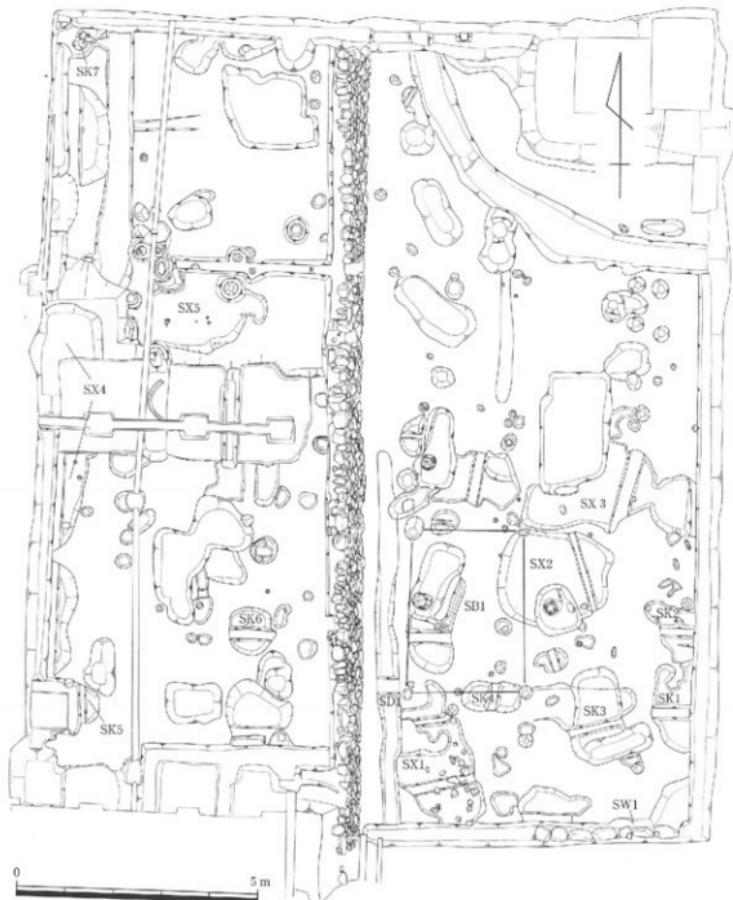
今回の調査は喜多町64-2に所在する関西電力長野変電所拡張工事に伴って調査を実施した。調査面積は238m²、調査は平成5年11月25日から同年12月24日まで行った。

調査対象地は南北に長い長方形を呈し、西側幅約7mの上段部と東側幅約7mの下段部とに分割される。上段と下段の境は現況石垣となり、段差1mを測る。

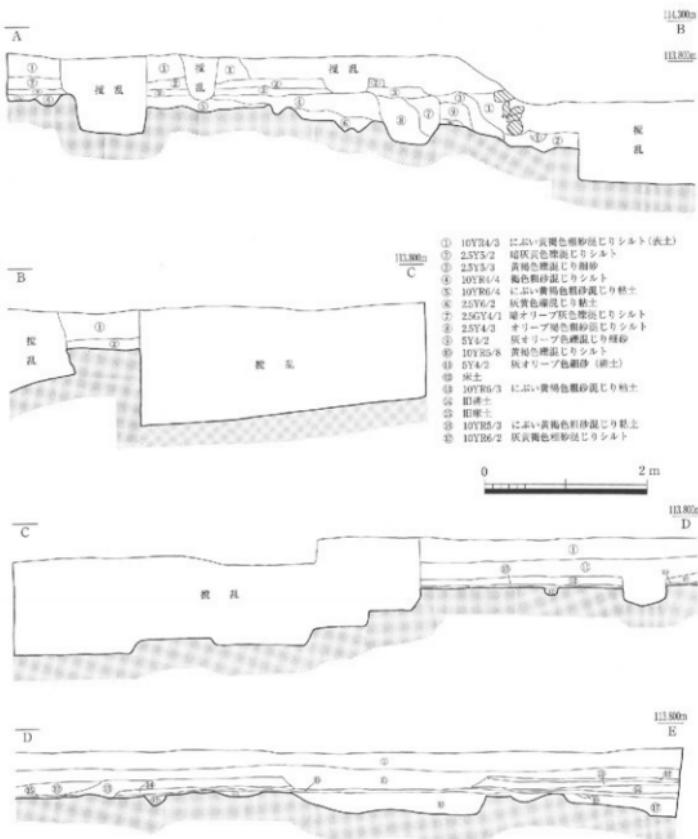
第2節 調査の結果

1. 遺構

調査区は建物の基礎等後世の搅乱を多く受けており、遺構については失われているものも多い。



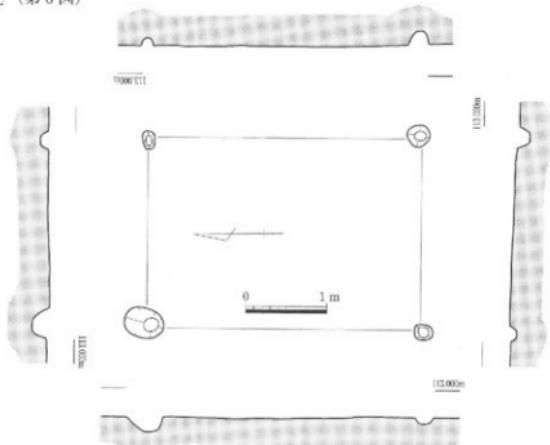
第4図 遺構配置図 (1/100)



第5図 調査区土層断面図 (1/60)

(1) 掘立柱建物

〔SB 1〕(第6図)



第6図 SB 1 遺構実測図 (1/60)

下段南側で検出された掘立柱建物である。規模は桁行1間(2.2m)×梁行1間(3.5m)であるが、柱間が長尺すぎる感があり、桁行の柱間があと1間あった可能性がある。桁行き方向は南北を示す。柱の掘形は円形で、掘形径0.25m、深さ0.16mを測る。柱穴は確認できなかった。

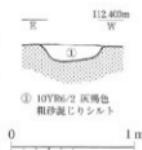
遺物は実測可能なものはなかった。

(2) 溝

〔SD 1〕(第7図)

下段調査区南側西端を南北に走る素掘溝である。検出長7.5mで南側は調査区外に伸びる。溝の幅は上端0.5m、下端0.3mで、深さは0.13mを測る。溝の埋土は灰褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

遺物は瓦器片、土師質土器片、瓦片が出土したが、実測可能なものはなかった。



第7図 SD 1 遺構
断面実測図 (1/40)

(3) 土坑

〔SK 1〕(第8・11図、図版3)

下段調査区南側東端で一部が検出された。平面形は不定形を呈する。遺構の東側は調査区外に広がる。検出規模は南北長1.96m、東西長0.78m、深さ0.16mを測る。埋土は灰褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師質土器、瓦器などの破片が出土した。このなかで弥生土器壺底部（5）が図示できた。

[SK 2] (第8図)

下段調査区南側東端でSK1の北側に接するよう検出された。平面形は不定形を呈する。

遺構の東側は調査区外に広がる。検出規模は南北長1.22m、東西長0.84m、深さ0.17mを測る。埋土は灰黄褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

遺物は土師質土器、瓦器、瓦などの破片が出土したが、実測可能なものはなかった。

[SK 3] (第9・11図)

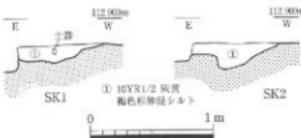
下段調査区南側で、SK1の西側約0.5mで検出された。平面形は丸四角形を呈する。遺構の南側は後世の搅乱を受けている。規模は長軸1.22m、短軸0.84m、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-11°-Eに偏する。埋土は灰黄褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

遺物は土師質土器、瓦器、須恵質土器、瓦などの破片が出土した。この中で陶器壺（7）が図示できた。

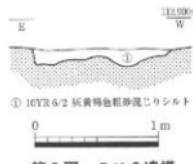
[SK 4] (第10図)

下段調査区南側で、SK3の西側約1mで検出された平面形が楕円形を呈する土坑である。規模は長軸1.44m、短軸0.64m、深さ0.17mを測る。主軸方向はN-5°-Wに偏する。埋土は灰黄褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

遺物は土師質土器、瓦器、瓦、サスカイトなどの破片が出土したが、実測可能なものはなかった。



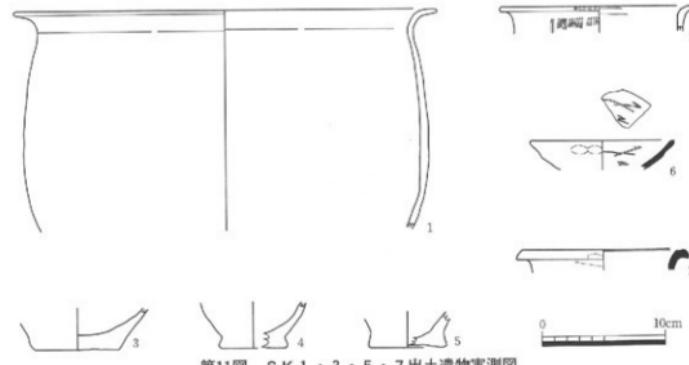
第8図 SK 1・2 遺構断面実測図(1/40)



第9図 SK 3 遺構
断面実測図(1/40)



第10図 SK 4 遺構
断面実測図(1/40)



第11図 SK 1・3・5・7出土物実測図

〔SK 5〕(第11図)

上段調査区南側の西端で検出された。平面形は梢円形を呈すると思われる。その大半は後世の擾乱を受けている。検出規模は南北長0.76m、東西長0.40m、深さ0.29mを測る。埋土は灰黄褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

遺物は土師質土器、瓦器などの破片が出土した。この中で瓦器塊(6)が図示できた。

〔SK 6〕(第12図)

上段調査区南側で、SK 5の北東約3mで検出された平面形が梢円形を呈する土坑である。規模は長径0.96m、短径0.86m、深さ0.23mを測る。主軸方向はN-1°-Eに偏する。埋土はにぶい黄褐色粘土混り粗砂が堆積している。

遺物は土師質土器、瓦器、須恵質土器などの破片が出土したが、実測可能なものはなかった。

〔SK 7〕(第11・13図、図版2・3)

上段調査区北側の西隅端で検出された。平面形は不明な落ち込みである。落ち込みは北西に向かってレベルを下げている。その一部は後世の擾乱を受けている。検出規模は南北長0.64m、東西長0.76m、深さ0.38mを測る。埋土は灰褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

遺物は弥生土器が底部から出土した。この中で図示できたのは甕口縁(1・2)・底部(3・4)である。

(4) 石列

〔SW 1〕

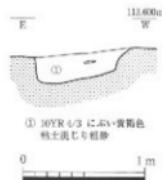
下段調査区南側辺で東西に石垣の基部にあたる1段が検出された。検出長は2.92mで東側調査区外に伸びるようである。高さは約0.20m石材は花崗岩の自然石で最大50cm×28cm×18cm、最小10cm×6cmのものが使用されている。

(5) その他

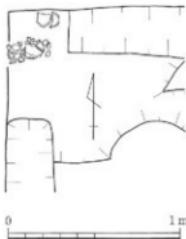
〔SX 1〕(第14・17図、図版2・3)

下段調査区南側のSD 1の東側に接するように検出された。平面形は不定形を呈する。規模は長軸3.06m、短軸1.54m、深さ0.15mを測る。長軸方向はN-1°-Wに偏する。遺構底部には最大30cm×20cm×18cmの垂角礫の川原石が使用されている。埋土は灰褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

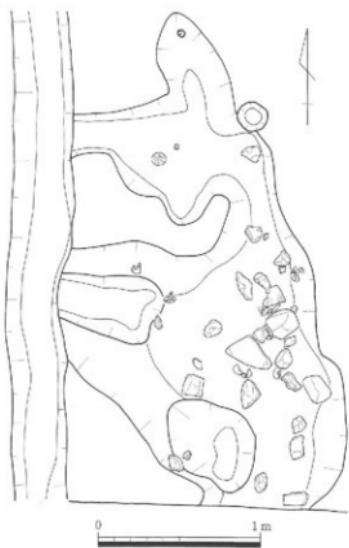
遺物は土師質土器、瓦器、須恵質土器、瓦、サヌカイトなどの破片が出土した。この中の土師質土器皿(10~14)、瓦器塊(15)、瓦質土釜(19)、備前擂鉢(20)が図示できた。



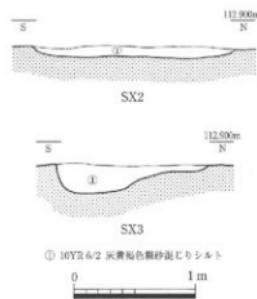
第12図 SK 6 遺構
断面実測図(1/40)



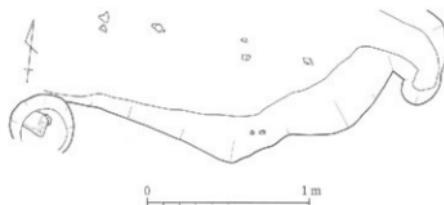
第13図 SK 7 遺構
実測図(1/30)



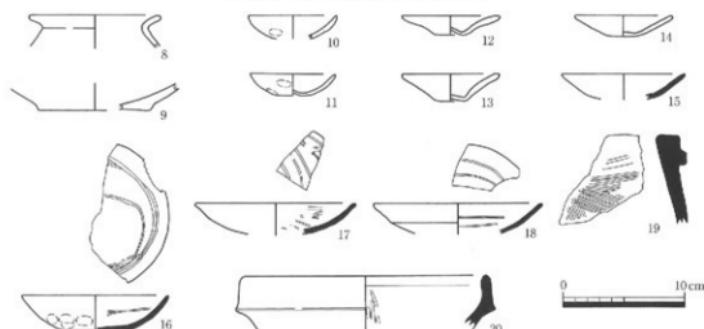
第14図 SX 1 遺構実測図 (1/30)



第15図 SX 2・3 遺構断面実測図 (1/40)



第16図 SX 5 遺構実測図 (1/30)



第17図 SX 1・3～5 出土遺物実測図

〔S X 2〕（第15図）

下段調査区南側中央で検出された。平面形はやや不定形な楕円形を呈する。規模は長径2.54m、短径2.32m、深さ0.2mを測る。長軸方向はN-28°-Wに偏する。埋土は灰黄褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

遺物は土師質土器、瓦器、陶器、瓦などの破片が出土したが実測可能なものはなかった。

〔S X 3〕（第15・17図）

下段調査区南側中央でS X 2の北側に接するように検出された。平面形が不定形な落ち込みである。遺構の1/3は後世の搅乱を受けている。規模は長軸3.44m、短軸1.92m、深さ0.2mを測る。長軸方向はN-88°-Wに偏する。埋土は灰黄褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

遺物は弥生土器、土師質土器などの破片が出土した。この中では弥生土器壺（8）が図示できた。

〔S X 4〕（第17図）

上段調査区南側西端で検出された。平面形が不定形な落ち込みで、西側は調査区外に広がる。遺構の中央は後世の搅乱を受けている。規模は長軸5.02m、短軸1.26m、深さ0.23mを測る。埋土は灰黄褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

遺物は弥生土器、土師質土器、瓦器、瓦などの破片が出土した。この中で瓦器壺（16～18）が図示できた。

〔S X 5〕（第16・17図）

上段調査区中央付近で検出された。平面形が不定形な落ち込みである。規模は長軸2.38m、短軸1.60m、深さ0.23mを測る。長軸方向はN-4°-Wに偏する。埋土は灰黄褐色粗砂混じりシルトが堆積している。

遺物は弥生土器、土師質土器、瓦器などの破片が出土した。この中の弥生土器壺（9）が図示できた。

（6）まとめ

大日寺遺跡はその名称のとおり、調査区に近接する喜多町28-2にある大日寺跡（現老人憩いの家）から命名されている。この寺の詳細は不明であるが、明治5年の記録では本堂が桁行3間×梁行2.5間で瓦葺、境内は東西9.5間、南北7.5間である。現在は本尊が石造大日如来である。

検出された遺構は性格が明確に判明したものはなく、ピットは検出されるものの、建物に復元できなかった。しかし、建物が存在することは間違いない。遺構の時代は大きく中世と弥生時代に分けられる。中世では出土瓦器壺から14世紀前半と思われる。弥生の遺構は壺が出土したS K 7である。このことにより当該遺跡は弥生時代からの複合遺跡であることが判明した。

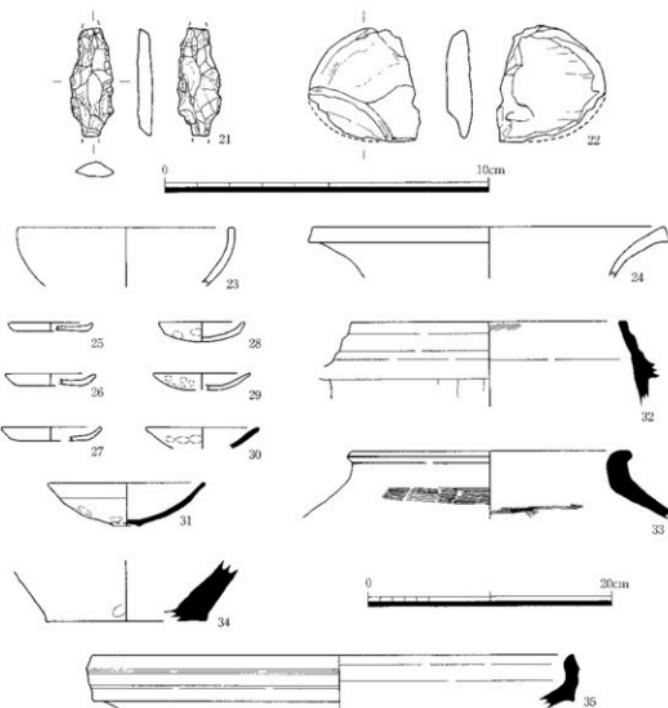
2. 遺物

(1) 造構・包含層出土遺物

本調査区から土器類、瓦類、石器類がコンテナ5箱出土している。出土遺物の時期は弥生時代・中世後半・近世の3時期を主とする。

〔弥生土器〕(第11・17・18図、図版3)

壺の口縁部(24)、底部(3・9)、甕の口縁部(1・2・8)、底部(4・5)、鉢類口縁部(23)がある。このうち(9)の壺底部は生駒西麓産のものである。(1~4)はSK7より、(8)はSX3より、(9)はSX5より、その他は包含層より出土している。これらの弥生土器は造構、包含層を問わずローリングが著しい。出土した弥生土器はおむね畿内III~IV様式に収まるものである。ただし(2)の甕口縁部は如意状に伸びる口縁に刻み目を施したもので、II様式以前に遡る可能性がある。この他に弥生時代に該当す



第18図 包含層出土遺物実測図

る遺物として(21)のサスカイト製有茎式石鏃、(22)の片岩製の石包丁、サスカイトの剣片が挙げられる。図化し得なかったものとしてSK1より粘土塊が出土しているがこれも弥生時代のものであろう。

[中世土器] (第17・18図、図版3)

土師質皿、瓦器塊、瓦質土器がある。土師質皿は口縁の立ち上がりが極めて低い褐色のもの(25~27)、底部が丸みを帯びた浅身のもの(28・29)、底部が平らもしくはへそ皿状に突出し、口縁が大きく外反するもの(10~14)などがある。(10~14)はSX1より、その他は包含層より出土している。

瓦器塊はいずれも形態的に退化したものである。口径12.5cm、器高3.5cmで、形骸化した高台を持つもの(31)、口径12cm、器高3cmで暗文を持つ、無高台のもの(16)、口径10cmで小皿状のもの(15・30)がある。(6)はSK5より、(15)はSX1より、(16~18)はSX4より、(30・31)は包含層出土である。これらの瓦器塊は尾上編年のIV期・13世紀後半以降のものばかりである。

瓦質土器には他に壺の口縁部(33)、土釜(19・32)が出土している。(19)はSX1出土で他は包含層である。(32)は菅原分類の和泉・河内DⅠ類の14世紀~15世紀のものである。

[近世土器] (第11・17・18図)

土師質土器、陶器、磁器がある。近世の土師質土器は図化し得たのはなかったが、壺類であると思われる破片も出土している。陶器では瀬戸美濃の塊、備前播鉢口縁部(20・35)・壺の口縁部(7)、常滑の壺底部(34)などがある。(7)はSK3より、(20)はSX1より、その他は包含層よりの出土である。

瓦類は近現代の平瓦、丸瓦がコンテナ1箱分出土している。総出土量の五分の一であるが主に包含層出土で丸瓦・平瓦の破片ばかりであった。

(2)まとめ

今次調査の遺物は弥生時代と室町時代のものが中心である。特に市内では少ない弥生時代の遺物が構造に伴って検出されたことは大きな成果といえるだろう。これらの弥生土器は破片を含めて弥生時代中期の畿内第Ⅲ~Ⅳ様式のものを主体とするが一部にⅡ様式以前に遡る可能性のものが含まれており周辺地域における調査の必要性を提起するところである

(藤原)

第3章 大日寺遺跡（DNT00-1）

第1節 調査にいたる経過



第19図 調査区位置図 (1/5000)

本次調査は河内長野市（担当環境下水道部工務課、以下市という。）を事業主とする、喜多町集会所建設工事に先立つ事前調査として行われた。平成12年、市は喜多町集会所を建設するにあたり、河内長野市教育委員会（以下市教委という。）と協議を行った。その結果、計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である大日寺遺跡にあたることから、発掘調査が必要であるとの見解を示した。この見解を受けて、平成12年6月15日に文化財保護法第54条の3に基づく通知を大阪府教育委員会を経由して、文化庁を行った。

平成12年6月26日、市は事前調査のために河内長野市遺跡調査会（以下遺跡調査会という。）に発掘調査を依頼した。遺跡調査会は事業を受託し、平成12年7月28日に委託契約を締結し、市教委の指導のもとに発掘調査を開始した。発掘調査は平成12年7月31日から同年9月30日にかけて行われた。現地での発掘調査業務については大谷女子大学が中心となって行った。

平成12年12月28日、市と遺跡調査会は報告書刊行のための内業整理の契約を締結した。内業整理は同年12月29日から平成13年3月28日にかけて行われ、全ての業務を終了した。

（太田）

第2節 調査の結果

1. 概略

今回の調査で検出された遺構は建物、井戸、土坑、溝で明確な建物礎石や柱穴などは確認されていない。とくに遺構の大半を占める土坑は、性格が明確に指摘されるものは見られず、いずれも瓦溜りあるいは用途不明である。これらのうちの一部については、礎石の抜き跡となる可能性もあり、それが確認されると建物跡が複数検出されたことになる。

遺構の検出位置は調査区の南側半分に集中しており、北側は遺構の確認が少なかった。また東側の、現在堂宇の残されている方向の方が遺構の検出状況が密であるといえる。



第20図 遺構配置図 (1/100)

2. 層序

調査の対象となった部分で層序を確認するために実測した断面は調査区東側と南側の二面である。

〔東壁〕(第21図A～D、図版6)

①表土層は層厚約0.2mをはかるが、厚さは一定しておらず凹凸が見られた。色調は10YR7/3にぶい黄橙色疊混じり粘土である。また耕作土として、この層が2層に区分される個所も見られたが、ほぼ1層と見てよい。次に層厚0.02～0.1mをはかる10YR6/2灰黃褐色疊混じり粘土で構成される②床土層が見られる。これは水田耕作に伴い、保水性を高めるための処置であり、大半の水田には認められる。第3層がいわゆる包含層であり色調は2.5Y4/4オリーブ褐色粘土である。当該層内に瓦、土器などの遺物が多く含まれていた。さらに下層は造構面であり、地山面でもあった。ちなみに包含層は北側では約0.2mの層厚をはかったのに対し、南側では0.05～0.1mと厚さに大きな差異が見られた。

〔南壁〕(第21図D～E、図版7)

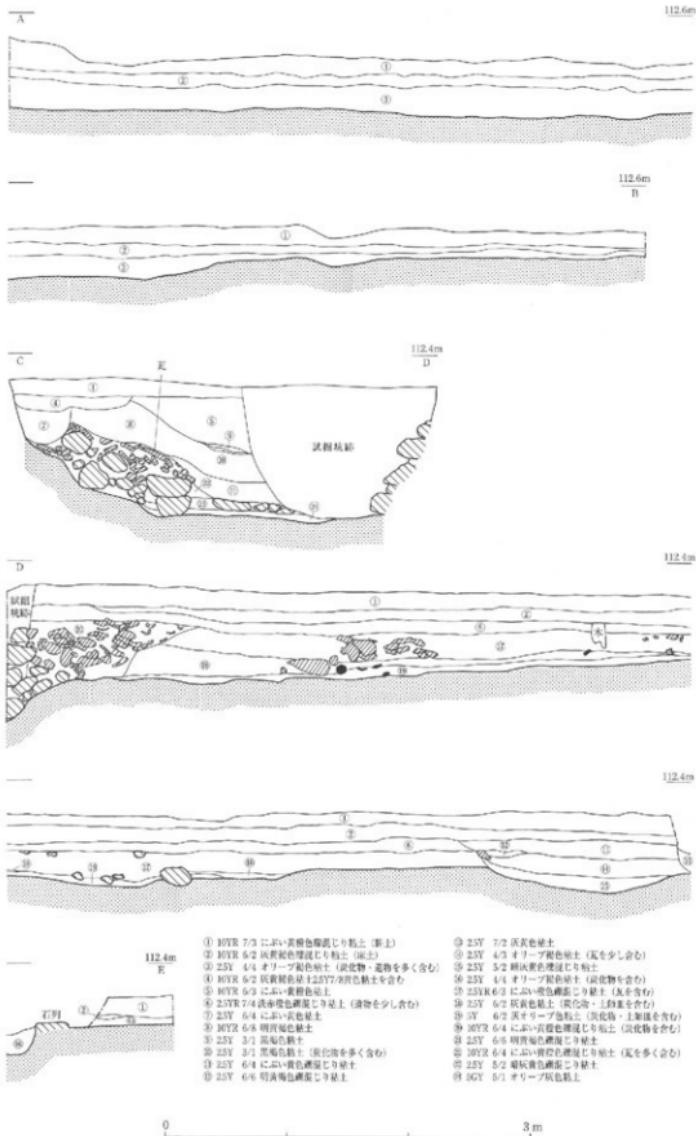
調査区の南端部の断面である。第1層の①表土層については、状況は全く東側断面と同じであり、層厚約0.2mをはかった。次いで第2層は同じく②床土層であり、ほぼ全体に約0.1mをはかった。第3層は⑥2.5YR7/4淡赤橙色の、遺物を含む疊混じり粘土である。層厚約0.1mで、東端の石垣部分の上層につながった。さらに第4層は大小の石や瓦、土器などを放り込んで埋め立てたと見られる2.5YR6/3にぶい橙色の、遺物を含む疊混じり粘土の包含層(⑦整地層)である。これに続いて第5層も整地のための、⑧2.5Y6/2灰黄色粘土である。なお西側端では、第3層の一部までを切って石列までの間に窪地が見られた。この状況から、少なくとも南端の部分は、以前に存在した瓦葺きの建物が破壊ないしは崩壊後、それらを南端部に捨てるようにして埋め立てを行い、地形的に崖となっている部分を少しでも拡張しようとしたものと考えられる。この拡張によって、現状の床土部分よりは高い地表面が構成されていたと見られる。特に東側で確認されている石垣状の造構は、その埋め立て工事に伴って設置された、土砂の崩落防止のための施設であったと考えられる。なお各造構内の断面については造構各節で関連あるものについて記述する。

3. 遺構

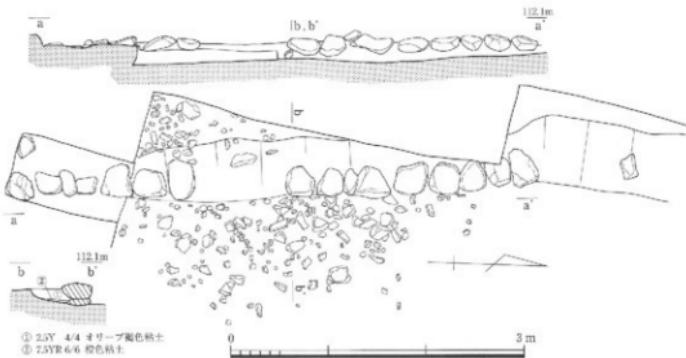
(1) 建物

〔S B 1〕(第22図、図版9)

調査区の南西端からほぼ南北方向に検出された石積みの基壇である。径約40cm×40cmの川原石で形成されており、最大二段までしか残されていなかった。おそらく耕作に伴い上部の石材は除去されたものと考えられる。現状の石列の全長は、5.4mを測り、なお南へ延伸しているものと考えられる。北側への延長は、調査範囲を拡張してみたが、わずかに1点石材が確認されたのみで、周辺の状況から推定する限り、現状の北端に近い部分が



第21図 調査区土層断面図 (1/40)



第22図 SB 1 遺構実測図 (1/50)

遺構の北端と見てよいと考えられる。なお南端から2m～3m部分の石が途切れていた。しかしその東側に見られる細かな散乱する石は途切れておらず、本来はこの欠けている部分にも石材が配石されていたものと考えられる。なお東面がそろった状況から見て、当該基壇を伴う建物は、これより西側に立てられていたと見るのが自然であろう。また建物の入口は、散乱する石材の状態から東側にあった可能性がある。石列の主軸はN-9°-Wであり、地形的には南側は2～3m部分から崖面となる。従って建物の方向的には東側入口が妥当ではないかと考えられる。なお西側については、現在民家の堀があるため、これ以上の調査は不可能であった。

遺物は出土しなかった。

〔SB 2〕(第23・24・43・54図、図版17・19・20)



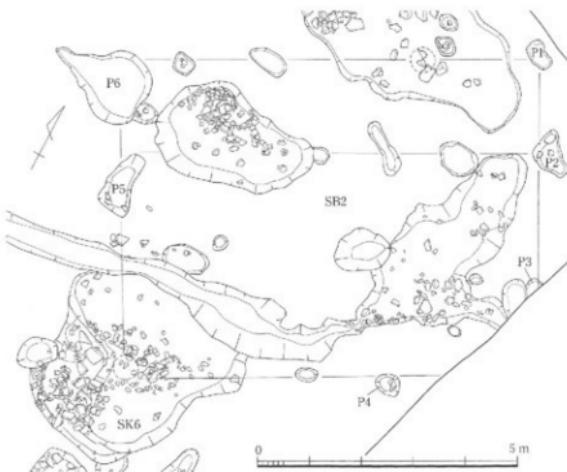
第23図 SB 2 出土遺物実測図

調査区内に散在する土坑を礎石の抜き取り跡として考えた場合に想定される礎石建物である。規模は桁行5間(8m)×梁行2間(4.3m)の主屋に北西側に1面庇(1.8m)が付く。主軸方向はN-60°-Eであった。建物は土坑や溝の重複により梁行きの柱間は明確に検出することはできなかった。

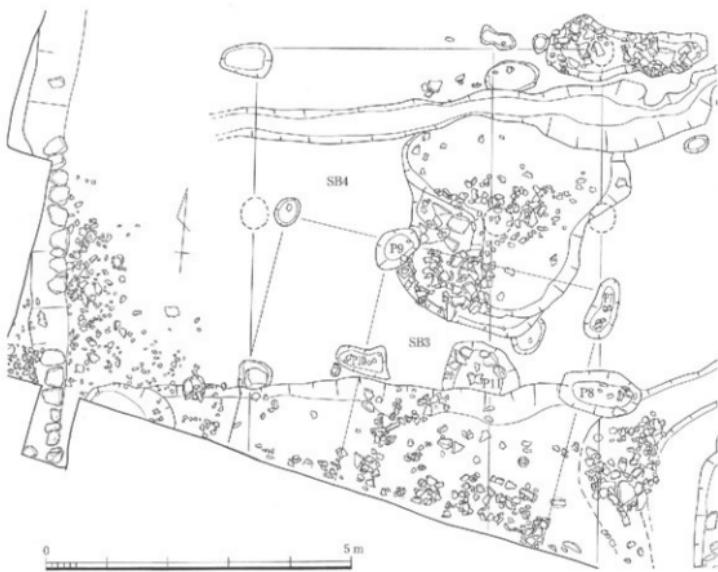
遺物はP 1より軒丸瓦(150)、軒平瓦(174)、P 2より土師質皿(36)、軒丸瓦、P 3より瓦質甕(37)が出土した。

〔SB 3〕(第25図)

調査区南端の埋め立て部分に所在した可能性のある建物である。これらも北東隅のP 7



第24図 SB 2 遺構実測図 (1/100)



第25図 SB 3 + 4 遺構実測図 (1/80)

やP 8を礎石抜き取り穴と考えれば礎石建物が想定される。規模は桁行2間以上(4.4m)×梁行2間(3.6m)の主屋に西側に1面庇(1.8m)が付く。主軸方向はほぼ南北方向(N-9°-E)となる。

当該遺構に伴う遺物はきわめて少なく、時期を決定するだけの遺物は出土しなかった。

〔SB 4〕(第25・26・52図、図版15・20)

調査区の南側で検出した。SB 3と重複する。この遺構も他の建物と同様に礎石建物と考えられる。規模は桁行3間以上(8.6m)×梁行1間(4m)の主屋の東側に1面庇(1.8m)が付くと想定される。主軸方向はN-9°-Wであった。

遺物はP 7から土師質灯明皿(38)、軒平瓦(169)、平瓦が出土した。

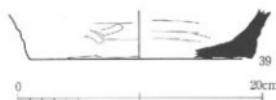


第26図 SB 4
出土遺物実測図

(2) 溝

〔SD 1〕(第27・28・52・71図、図版21・22)

調査区の中央部分から南に東西に斜めに横切る溝である。幅0.4~1.1cm、深さ0.05~0.2cmを測る素堀の溝であり、西から東に、わずかに円弧を描いて伸びる。東側でSK 3と連結していた。



第27図 SD 1 出土遺物実測図

遺物は備前壺底部(39)、軒平瓦(167)、埴(205)が出土した。



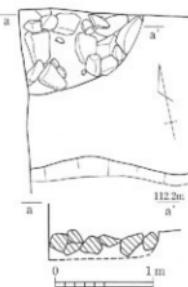
第28図 SD 1・SF 1・SX 1 遺構実測図(1/100)

(3) 井戸

〔S E 1〕(第29図、図版10)

西側拡張区の北端で検出された。調査最終段階の拡張部分とすることもあり、その約1/4程度の確認であった。より正確には内部の精査と西北方向への拡張が不可欠であったが、調査区からはみ出る可能性や、水路として使用されている部分を損壊させることなどから、あえてその確認のための調査は行わなかった。検出部分の径は、1.1m×0.9m、深さ約0.4mを測り、内部には約40cm前後の川原石が13個認められた。内部には水が溜まっており、石を取り除くとより多くの水が溜まるようになった。井戸遺構としては、周囲の圍み石や井戸枠の確認が必要であるかもしれないが、先の理由からできなかった。

遺物は出土しなかった。



第29図 S E 1
遺構実測図(1/50)

(4) 道

〔S F 1〕(第28図)

S D 1と南側で検出されたS X 1とが約4mの幅で平行している。この平行する遺構の間が道(S F 1)と想定される。その部分は瓦や土器などを埋めて形成されている拡張地に該当する。現在も見られる東西の道が、かつてはこの部分を通っていたと考えられる。調査区南西隅のS B 1の石積み列が、北部と南部の二か所で途切れているが、これも当該道の設置に伴ってその石材が抜かれたためと考えができる。いずれにしてもこの道の年代は、S B 3・4の設置以前であり、かつS B 1放棄後の時期とすることができる。無論、他の建物や土坑などよりもはるかに後出段階であることはいうまでもないだろう。

(5) 土坑

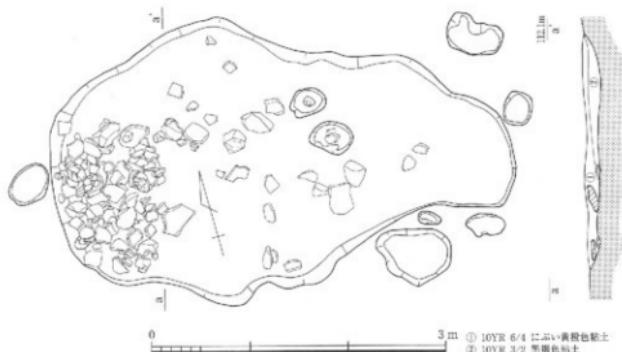
〔S K 1〕(第63図)

調査区の東北隅で確認された。南北1.3m、東西1.5m、深さ0.1mを測り、楕円形をなす。内部には40~50cmの川原石が見られたが、とくにそれらの石が意識的に配置された印象は受けない。

遺物は平瓦が15点、瓦器8点が出土したが、平瓦(194)が実測できた。

〔S K 2〕(第30・31・51・54図、図版10・17)

調査区の北端に近い東側で検出された。東西4.7m、南北3.0m、深さ0.2mをはかり、楕円形を呈する。内部は二層からなっており、上層は10YR6/4にぶい黄橙色粘土を多く含む層で、下層は10YR3/2黒褐色粘土である。上層には川原石、下層には瓦などの遺物を包含していた。出土遺物は比較的多く見られ、かつそれらが西側部分に集中している。また東



第30図 SK 2 遺構実測図（1/50）

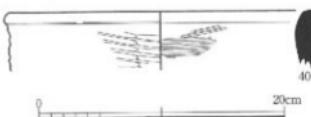
側部分には比較的大きな川原石と、径0.3~

0.4mをはかるピットが2個検出されている。

これらの状況から当該遺構は生活痕跡という

よりも、何らかの祭祀に供された可能性が考

えられる。



第31図 SK 2 出土遺物実測図

遺物は土師質土器41点、瓦器64点、瓦質土器1点、陶器1点、軒丸瓦1点、軒平瓦2点、丸瓦29点、平瓦75点、他の瓦8点が出土したが、瓦質甕(40)と軒平瓦(166・173)が実測できた。

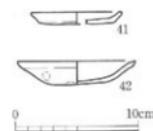
[SK 3] (第32・47・73図、図版22)

調査区の北端からわずかに南にいたる東端に位置する。南北4.1m、東西2.0mを測り、南北に長い不定形な土坑である。SK 2の東端と当該遺構の北端とはわずかに0.3mしか離れていない。また南西側ではSD 1の東端と重複している。中央部に設置した土層観察窓では、先のSK 2と同様、上層は10YR6/4鈍い黄橙色砂質土で、下層は10YR3/4暗褐色砂質土である。上下の層がいずれも砂質であるというは意識的に埋められた可能性を持つ。

遺物は北端部、東側、西側、南端部と4か所に集中して見られた。しかしSK 2のようにピットや遺物の集中が見られず、そこに祭祀に供された状況を読み取るのは困難である。また使用痕跡のある日常雑器(擂鉢)も採取されており、当該土坑は生活雑器の捨て場というような性格が付与されよう。

遺物は上下両層から土師質土器30点、瓦器6点、瓦質土器4点、軒丸瓦2点、丸瓦26点、平瓦127点、道具瓦1点のほか焼土6点が出土したが、土師質甕(41・42)、軒丸瓦(157)、鬼瓦(209)が実測できた。

[SK 4] (第34・35・54・55図、図版11・17)



第32図 SK 3
出土遺物実測図

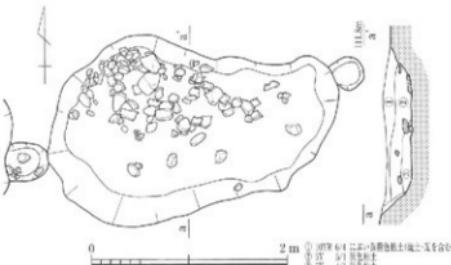


第33図 SK 3・5 遺構実測図 (1/50)

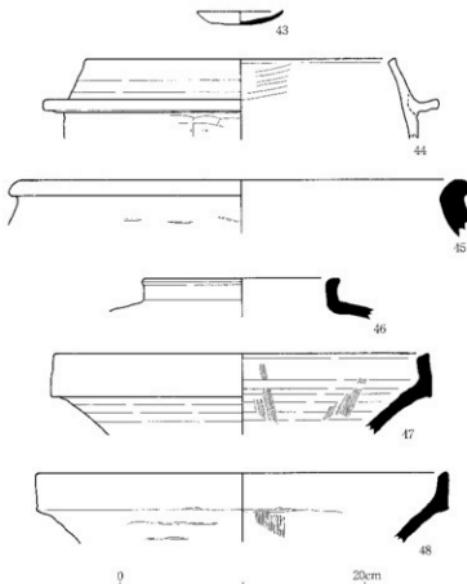
調査区の中央部北寄りに位置する。北へ1.6mでSK2が、また東へ2.5mでSK3が位置している。東西2.9m、南北1.9mを測り、形態的には梢円形に近く、また先のSK2の形態にも近似するが、規模的には小型である。中央に設定したセクションの観察では第1層は10YR6/4にぶい黄橙色粘土で焼土や瓦など遺物を包含していた。第2層は5Y1/5灰色粘土で、小石や遺物を含んでいた。さらに第3層は5Y4/1灰色粘土で一部に砂が混じっていた。

遺物は北側からまとまって出土したが、とくに第1から第3層までで、どの層が多いということはなかった。遺構の性格は、形状や遺物の配置状況などから、SK2とはほぼ同じと考えられる。

遺物は、土師質土器27点、瓦器12点、瓦質土器11点、陶器15点、軒丸瓦1点、軒平瓦3点、丸瓦45点、平瓦205点などがあり、他に、焼土3点が出土したが、土師質土釜(44)、瓦質皿(43)・甕(45)、備前壺(46)・捕鉢(47・48)、軒平瓦(176・181)が実測できた。



第34図 SK 4 遺構実測図 (1/50)



第35図 SK 4 出土遺物実測図

〔SK 5〕(第36・49・51図)

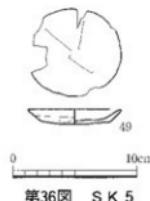
調査区の中央部東寄りに位置する。東0.1mにSK 3が、北0.8mにSK 4が位置する。SD 1とは南側で接している。東西2.6m、南北1.1m、深さ0.1mを測り、東西に長い、不定形な楕円形を呈する。

遺物は土師質土器1点、瓦器8点、軒丸瓦80点、軒平瓦2点、丸瓦24点、平瓦128点、道具瓦1点、その他の瓦1点のほか焼土3点が出土したが、土師質皿(49)、軒平瓦(161・165)が実測で

きた。圧倒的に瓦の出土が多く土器類の出土が少ないのが特徴である。とくに軒丸瓦の出土が最も多く見られ、注目される。これらの遺物出土状況やその形状などから当該構造は、瓦溜めとして供されたものと考えられ、そこでの祭祀の存在などは可能性としてはきわめて薄いと考えられる。

〔SK 6〕(第37・42・43・49・54・56・62・64~66・68・70・73図、図版17・19・20・21)

調査区の中央部南寄りで検出された。SD 1と、SX 1とに囲まれた範囲内に位置する。即ちこの部分は既述の状況から道(SF 1)として利用された可能性の濃い部分であるが、SK 6はその利用以前に構築されていたものである。また道として使用されていた段階に



第36図 SK 5
出土遺物実測図

は上層を土砂が覆っていたものと考えられ、これらの遺構及び遺物が表面に露呈していたとは考えられない。なお他の遺構との位置関係は、北1.1mにSK5、同じく北2.2mにSK4、北東2.6mにSK3、さらに南1mにSX1が各々所在する。南北3.5m、東西2.9m、深さ0.1mをはかり、不定形を呈する。

遺物は土坑内部に散らばっており、とくに中央部及び南西部に多く検出されている。

土師質土器77点、瓦器34点、瓦質土器6点、陶器11点、磁器1点、軒丸瓦13点、軒平瓦5点、丸瓦137点、平瓦685点、道具瓦2点、その他の瓦4点のほか焼土が出土したが、土師質皿(50)・土釜(54)・小型瓦器塊(51~53)、軒丸瓦(148・149・152)、軒平瓦(159・172・174・179)、鬼瓦(207)、平瓦(195・197・198・201)、丸瓦(185・192)、雁振瓦(203)が実測できた。とくに遺物の量では、今回調査で検出した遺構の中でも多いほうに分類される。特筆すべきものとしては中国からの輸入品と見られる青磁碗の破片が出土している点であろう。また瓦が多いことや位置関係から、当該遺構の性格は、瓦溜り、或いは日常生活での雑器類の捨て場所と見てよいのではないだろうか。なお遺物の特定部分への集中や、遺物の偏りなど祭祀跡と見られる可能性は、殆どないといって過言ではない。

(6) 落込み

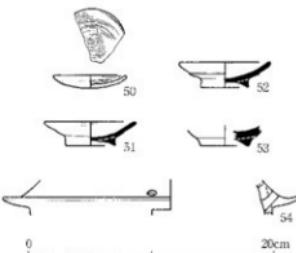
〔SX1〕(第38~46・48・49・52・53・56~61・63・64・67・69・70・72図、図版12~22)

調査区の南端部分に位置する。調査段階ではSX1を土坑と考えて調査を進めたが、既述のように当該部分は調査区南端部の落ち込みに対する埋め立て部分に該当する。出土遺物は遺構内遺物とは考えられず、埋め立てに伴う土砂に含まれていた遺物と考えられる。

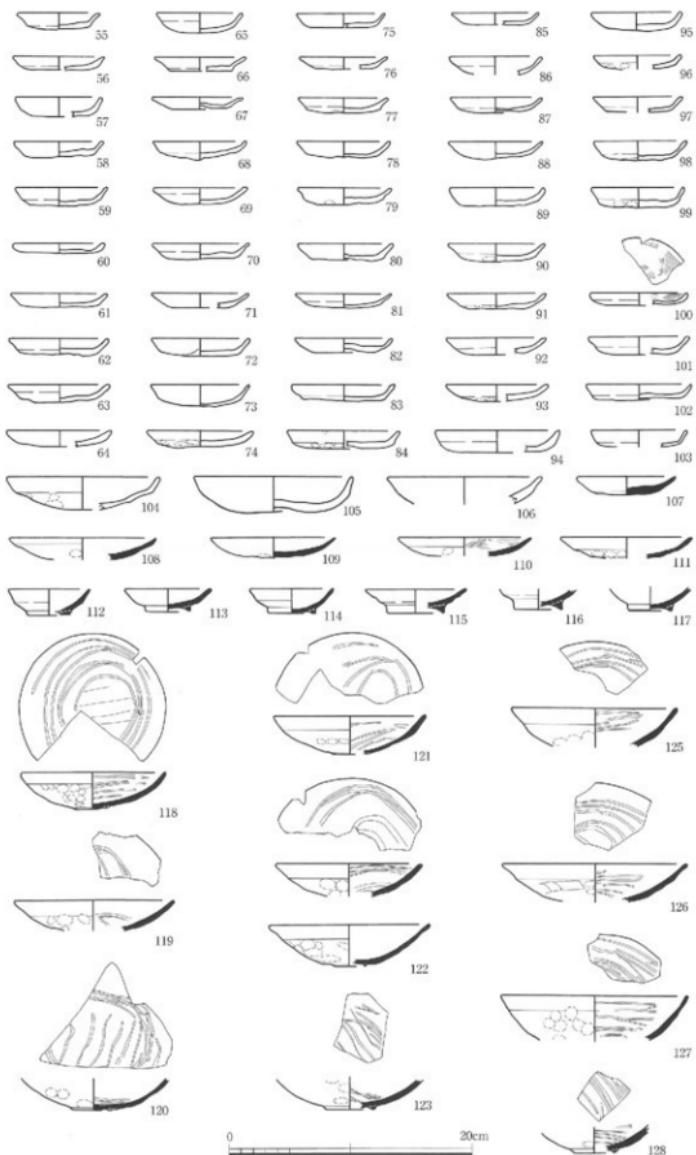
遺物は土師質土器、瓦器、陶器、磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦などすべての遺物の種類が出土した。それらの出土状態に、とくに特徴ある配置状況などは確認されていない。土師質皿(55~106)、瓦器(118~138)、小型瓦器(112~117)、瓦質皿(107~111)・擂鉢(140)・甕(139)、不明金属製品(141)、軒丸瓦(142~147・151・153~156・158)、軒平瓦(160・162・168・170・171)、丸瓦(182~184・186~188・190・191)、平瓦(193・196・200・202)、雁振瓦(204)、博(206)が実測できた。

(7)まとめ

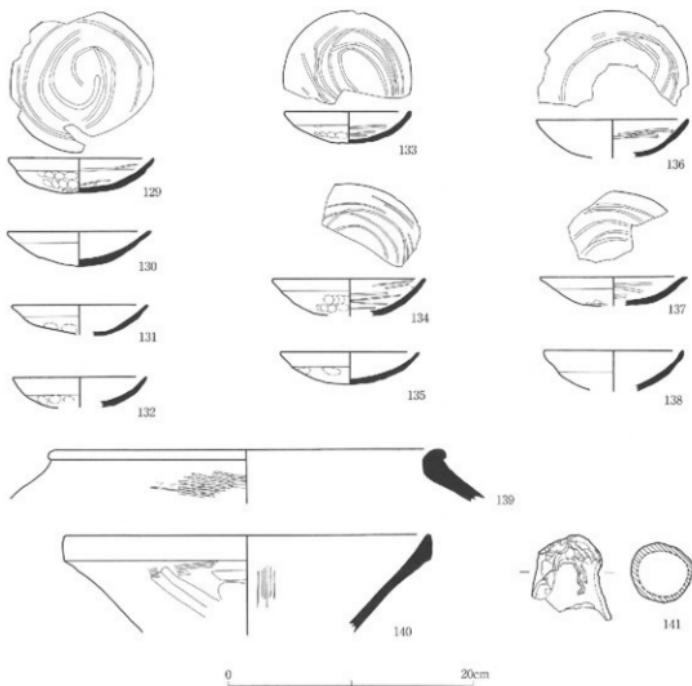
以上、今回の調査で検出された遺構について記述してきた。とくに土坑遺構の連続関係や関連からいくつかの建物遺構の想定や溝遺構の関連から道の存在を推定してきた。その道は、かつての寺院の建物が失われてからのものであり、その時期は近世に入った間も



第37図 SK6出土遺物実測図



第38図 S X 1出土遺物実測図（1）



第39図 S X 1 出土遺物実測図（2）

ない段階ではなかったかと推定される。さらに現在の地形からみて、当初の寺院遺構が見られなくなつてから、土地の南側への拡張を図つてきた埋め立て工事の状況とその痕跡と遺構を確認することもできた。その埋め立て工事は、当該寺院の大半が失われた段階で行われたと考えられる。この造成工事の後に、当該地域は別個の建物が建築され、またそれが失われた後に、新たに水田として、全く異なる地目に変更されて今日に及んでいる。

大日寺という寺院の痕跡としては、今回の発掘調査では余り明瞭な証拠となる材料、遺構の検出、確認は少なかったが、一定程度以上の遺構、遺物の検出があり、それなりの解釈及び理解が可能であることを示したと考える。かつては三日市という宿場に近接し、高野山参詣の主要道として栄えた高野街道に隣接し、あるいは沿道の一角にあって旅人から信仰された、あるいは地元の崇拜を集めた地域の小堂として、これらの遺跡が果たしてきた役割は大きいものがあったと考えられる。しかしその具体的な状況がどうだったのかは、残念ながら明確にしがたい。今後資料の増加をまって再検討できる機会が訪れる事を願ってやまない。

（中村）

4. 遺物

(1) 概略

今回の発掘調査で出土した遺物は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、雁振瓦、面戸瓦、鬼瓦などの瓦類と土師質土器、瓦器、瓦質土器、陶質土器、陶器、輸入磁器などのほか、形状不明な鉄製品やサヌカイトなど多数の種類の遺物が見られた。

まず瓦類について見ると、総数3,406点が採集されており、そのうち最も多いのは平瓦

遺構名	土師質皿	その他の 土師質土器	瓦	器	瓦質土器	陶質土器	簡 器	磁 器	その他の	土器小計	軒丸瓦	軒平瓦	丸 瓦	平 瓦	雁振瓦	面戸瓦	鬼 瓦	不 明	瓦小計
P 1									1	1									
P 2	3									3			1	5					6
P 3		3								3			3	1					4
P 4	9									9	28	2	4	10					44
P 5													2	3					5
P 6	1												13	69					82
P 7													1	2					3
P 8	7	1								8		1	8	71				1	81
P 9												1	3	9					13
P 10	1	3					1			5			5	9					14
P 11													7	16	1				24
SD 1	4									4	15	80		1	1				97
SK 1		8								8					15				15
SK 2	41	64	1		1					107	1	2	29	75				8	115
SK 3	29	1	6	4						燒土 6	46	2		26	127	1			156
SK 4	27		12	11	3	15	燒土 3			71	1	3	45	205				1	255
SK 5	1		8							燒土 3	11	8	2	24	128	1	1		164
SK 6	74	3	34	6		11	1			128	13	5	137	685	2	4		846	
SK 7														5	21				26
SP 1	9		19							28		1		1					2
SP 2	3										3				8				8
SP 4	2											2							
SP 3		1										1			5				5
SP 5												燒土 1	1			2			2
SP 6														1					1
SP 7														1	1				2
SP 8														4	1				5
SX 1	324		219	42	3	9	2			604	38	8	429	415	68	15		973	
包含層	5										5	3	34	89	326			6	458
合 計	540	4	378	64	6	38	30	1049	110	138	837	2211	74	36	3406				

第2表 遺物出土遺構一覧表

で2,211点（片）、次いで丸瓦の837点である。軒丸瓦は110点、軒平瓦は138点で、ほぼ近似する数値であるといえるだろう。文様的には軒丸瓦では三巴文がすべてを占めており、蓮華文様などは見られない。一方、軒平瓦では、「阿弥陀仏」の文字を配置した葡萄唐草文を伴うものが1点のみ確認された。この他には連珠文、あるいは中央飾りに宝珠を伴った唐草文などがみられた。また道具瓦としては、埠が2点出土しており、時期的に遡る可能性のある遺物である。このほか雁振瓦が4点（少なくとも2個体以上）、面戸瓦が2点確認されている。後者の一つは、三面をヘラ削りによって整形されたものであり、あと一つは丸瓦の両端を斜めに欠いて転用したものである。このほか鬼瓦が3点出土しており、当該調査地に瓦を伴った建物が存在したことを十分に想定させるものである。

出土遺構はSK2～6、SX1からのものが多く、他は包含層のものである。このうちSK2～6はいずれも瓦溜めの可能性のある遺構である。なおSK6では焼土が表面を覆っており、当該遺構が火災にあった可能性を示唆している。

土器類について見ると、総数1023点（片）が採集されている。種類別に見ると、土師質土器が最も大量に見られ、544点を数える。次いで瓦器、瓦質土器が442点、陶器は38点とはあるかに少ない。また近接した地区的墳墓から中国製の輸入磁器が出土し^{注1}、当該調査区でも当初は大いにその出土が期待されたが、わずかに青磁の細かな破片が3点採集されたのみである。

次に遺物の出土遺構を見ると、SK2～6、SX1と、先の瓦検出遺構と重複するものが多い。また土師質土器と瓦器は、一方のみが確認されるという遺構は少なく、その量の差は見られるが、必ず両者は同じ遺構から検出されていることがわかる。即ちこれらの土器は、生活用にせよ、祭祀用にせよ両者は組み合わされた状態で使用されたものと思料される。しかし他の遺跡などで確認されているような、地鎮具や祭祀に伴う用具というような扱いで埋められていたものではない。

また焼上が同時に確認されている遺構はSK3～6、SX1である。またこれら焼土と同じ種類のものであるが、建物の壁の破片も出土している。これは当該遺構部分に明らかに壁を伴う建物が存在した証明でもあり、重要である。

各出土遺物については、以下、遺物ごとに記述していくことにする。

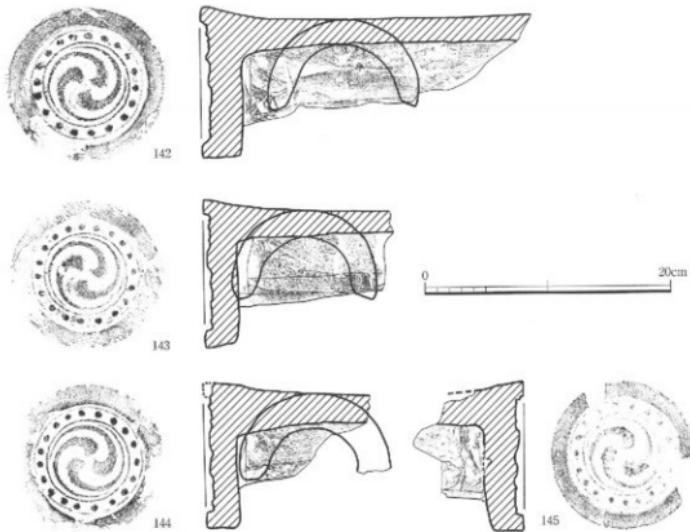
（2）瓦類

〔軒丸瓦〕

軒丸瓦はいずれも三巴文を内区中心に配し、その周囲外区に珠文をめぐらせるもので、巴文及び周囲の珠文の形状などからいくつかに区分することができる。とくに量的に多くを占めるものから1類、2類、3類……、と区分して記述を行う。

軒丸瓦1類（第40図、図版18）

SX1から出土した。破片を加えると相当数見られるが、全部で4点（142～145）が図



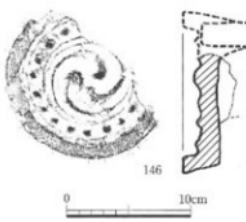
第40図 軒丸瓦1類実測図

化できた。径13.5cm、内区径7.0cm、外区径9.7cm、周縁幅1.0~1.5cmをはかる。内区文様の三巴文巴頭部は丸みを持ち、わずかに鍵型をなすが、尾は細長く伸びており、右回り(時計に順)である。なお最初の巴の尾は、次の巴文様の半ばに至っている。内区と外区の境には圈文(線)が巡る。外区は珠文からなり、合計19個の珠文が配置されている。珠文の外周は内区と同様圈文が巡っている。周縁は比較的低く、0.5~1.0cmをはかり、周縁上は無文である。瓦当の厚さは3cm前後をはかり、外面はナデ調整を行う。瓦当面と丸瓦の接合は、瓦当裏面上位に丸瓦をわずかに喰いこませ、接合部分背面に粘土を少量補強するという手法である。

丸瓦内面は布目とその繋ぎ目などが良好に残されており、外面には縦方向のナデ調整が認められる。焼成は良好で固く焼けしまっており、胎土はやや粗で、白色砂粒を含む。また瓦当表面及び丸瓦内面には、大量の離れ砂の痕跡が認められる。

軒丸瓦2類(第41図、図版19)

SX1から出土した。出土量は多くはない。図化できたのは1点(146)である。径13.5cm、内区径7.5cm、外区径11.0cm、周縁幅1.1~1.2cmをはかる。内区文様の三巴文巴頭部は小さく丸みを持ち、わずかに鍵型をなすが、尾は細長く伸びており、右回り(時計に順)で

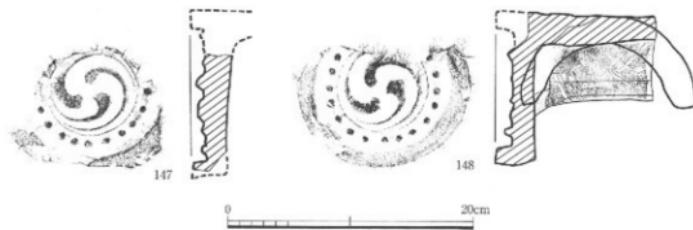


第41図 軒丸瓦2類実測図

ある。なお最初の巴の尾は、次の巴文様の半ばに至り、外周の圓文に合流する。内区と外区の境には圓文（線）が巡る。外区は珠文からなり、合計18個の珠文が配置されている。珠文の外周は内区と同様圓文が巡っているが途中で消えている。周縁は比較的高く1.5cmをはかり、周縁上は無文である。瓦当の厚さは1.5~3.0cm前後をはかり、外面はナデ調整を行う。瓦当面と丸瓦の接合は、瓦当裏面に丸瓦を深く喰いこませ、接合部分背面に粘土を少量補強するという手法である。

丸瓦は残されていない。焼成は甘く軟質、胎土はやや粗である。

軒丸瓦 3類（第42図、図版19）



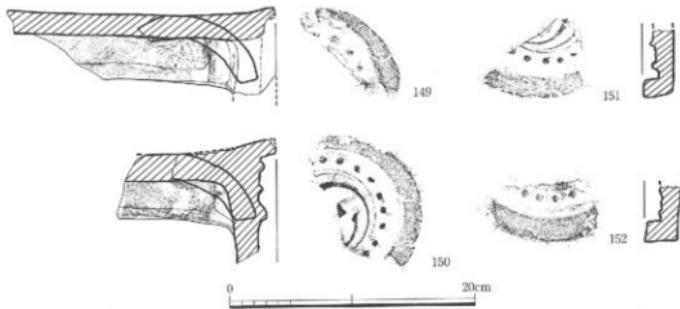
第42図 軒丸瓦 3類実測図

SK 6・SX 1から出土した。出土量は多くはない。図化できたものは2点（147・148）である。径14.1cm、内区径7.5cm、外区径11.3cm、周縁幅1.3~1.5cmをはかる。内区文様の三巴文巴頭部は小さく丸みを持ち、わずかに鍵型をなすが、尾は細長く伸びており、左回り（時計に逆）である。なお最初の巴の尾は、次の巴文様の半ばに至り、外周の圓文に合流するが、尾の長さは各々異なる。内区と外区の境には圓文（線）が巡る。外区は珠文からなり、合計20個の珠文が配置されている。珠文の外周は文様を伴わない。周縁は比較的高く1.5cmをはかり、周縁上は無文である。瓦当の厚さは1.7~3.5cm前後をはかり、外面はヘラナデ調整を行う。瓦当面と丸瓦の接合は、瓦当裏面に丸瓦をやや深く喰いこませ、接合部分背面に粘土を少量補強するという手法である。

丸瓦内面は布目などが殆ど確認できず、外面には縱方向のヘラナデ調整が認められる。焼成はやや甘く軟質で、胎土は密、断面灰白色、表面は黒灰色である。丸瓦表面に剥離痕跡が認められる。これが凍結によるものか、あるいは火災によるものかは明らかではないが、後者の可能性が濃い。

軒丸瓦 4類（第43図、図版19）

SK 6・SX 1出土から出土した。出土量は多くはない。図化できたものは4点（149~152）である。復元径15.0cm、内区径9.0cm、外区径11.0cm、周縁幅1.0~1.7cmをはかる。内区文様の三巴文巴頭部は小さく丸みを持ち、わずかに鍵型をなすが、尾は細長く伸びており、左回り（時計に逆）である。なお最初の巴の尾は、次の巴文様の半ばに至る。内

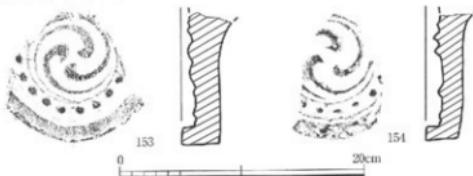


第43図 軒丸瓦 4類実測図

区と外区の境には圖文（線）が巡る。外区は珠文からなり、合計20個の珠文が配置されている。珠文の外周は文様を伴わない。周縁は比較的高く1.5cmをはかり、周縁上は無文である。瓦当の厚さは1.9~3.0cm前後をはかり、外面はヘラナデ調整を行う。瓦当面と丸瓦の接合は、瓦当裏面最上位に丸瓦をやや深く喰いこませ、接合部分背面に粘土を少量補強するという手法である。

丸瓦内面は布目が、外面には綫方向のヘラナデ調整が認められる。焼成はやや甘く軟質で、胎土は密、断面灰白色、表面は黒灰色である。丸瓦表面に剥離痕跡が認められる。これが凍結によるものか、或いは火災によるものかは明らかではないが、後者の可能性が濃い。

軒丸瓦 5類（第44図、図版19）



第44図 軒丸瓦 5類実測図

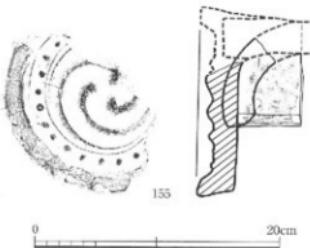
S X 1 から出土した。出土量は多くはない。図化できたものは2点（153・154）である。復元径14.0cm、内区径7.7cm、周縁幅1.2cmをはかる。内区文様の頭部は、わずかに丸みを持ち鍵型をなす。尾の部分は細く長く伸び全体の1/2に及ぶ。なお最初の巴の尾は、次の巴文様の2/3に至る。外区の境には圖文（線）が巡り、尾の先端は圖文に合流する。外区には18個の珠文が配置され、周縁との境にも圖文がめぐらされている。なお周縁上は無文である。瓦当部分の幅は3.5cmをはかり、背面にはヘラナデ調整が行われている瓦当面との接合方法は瓦当面背面上位に丸瓦を深く食い込ませ、接合部分背面に粘土をわずか

に補強するというものである。丸瓦部分は欠損のため不明。焼成はやや甘く軟質で、胎土は粗である。

軒丸瓦 6類（第45図、図版19）

S X 1から出土した。出土量は多くはない。

図化できたものは、わずかに1点（155）である。復元径16.5cm、内区径9.8cm、周縁幅1.5~1.8cmをはかる。内区文様の三巴文の巴は比較的細く、頭部は丸みをもち、わずかに鍵型をなす。巴の方向は右回り（時計に順）である。巴の尾部は細く長くほぼ1/2を超える。内区と外区の間には圓文が巡る。外区は珠文から構成されており、珠文の径は比較的小さい。周縁は比較的高く1.5cmをはかり、周縁上は無文である。瓦当の厚さは2.0~3.5cm前後をはかる。瓦当面と丸瓦の接合は、瓦当裏面最上位に丸瓦をやや深く喰いこませ、接合部分背面に粘土を少量補強するという手法である。

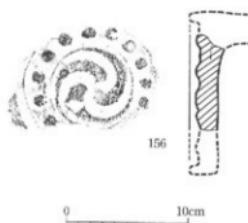


第45図 軒丸瓦 6類実測図

丸瓦内面は布目などが殆ど確認できず、外面には縱方向のヘラナデ調整が認められる。焼成はやや甘く軟質で、胎土はやや粗である。

軒丸瓦 7類（第46図、図版19）

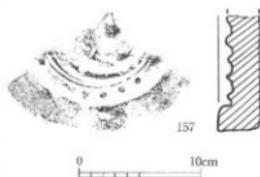
S X 1から出土した。出土量は多くはない。図化できたものはわずかに1点（156）である。復元径14.0cm、内区径6.8cm、周縁幅0.8cmをはかる。内区文様の巴は比較的太く、頭部は厚くまるみをもち、わずかに鍵型をなす。巴の方向は右回り（時計に順）である。巴の尾部は細く長くほぼ1/2を超える。内区と外区の間には巴の尾によって形成された圓文が巡る。外区は珠文から構成されており、珠文の径は比較的1.1cmとやや大きい。周縁との境には、圓文を巡らせる。周縁は比較的高く1.1cmをはかり、周縁上は無文である。瓦当の厚さは2.0~2.9cm前後をはかる。焼成はやや甘く軟質で、胎土はやや粗である。



第46図 軒丸瓦 7類実測図

軒丸瓦 8類（第47図）

S K 3・6、S X 1から出土した。出土量は多くはない。図化できたものはわずかに1点（157）である。復元径17.0cm、内区径10.0cm、周縁幅2.0~2.2cmをはかる。軒丸瓦4類に近似する。内区文様の三巴文の巴

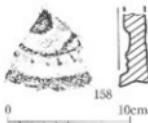


第47図 軒丸瓦 8類実測図

は比較的細く頭部はまるみをもち、わずかに鍵型をなす。巴の方向は左回り（時計に逆）である。巴の尾部は細く長くほぼ半周を超える。内区と外区の間には圓文が巡る。外区は珠文から構成されており、珠文の径は比較的の0.6cmとやや小さい。周縁は比較的高く1.1cmをはかり、周縁上は無文である。瓦当の厚さは1.5~3.2cm前後をはかる。焼成はやや甘く軟質で、胎土はやや粗である。

軒丸瓦 9類（第48図）

S X1から出土した。出土量は図化できたもののみで、わずかに1点（158）である。残存径5.5cm、周縁幅0.8~1.0cmをはかる。内区文様はほぼ三巴文と考えられるが、残存状況からは断定できない。あるいは文字あるいは蓮華文の可能性がある。内区と外区の間には圓文が巡る。外区は珠文から構成されており、珠文の径は0.3cmと比較的細かい。周縁との境には、圓文を巡らせる。周縁は比較的高く0.8cmをはかり、周縁上は無文である。瓦当の厚さは1.4~2.5cm前後をはかる。焼成はやや甘く軟質で、胎土はやや粗である。

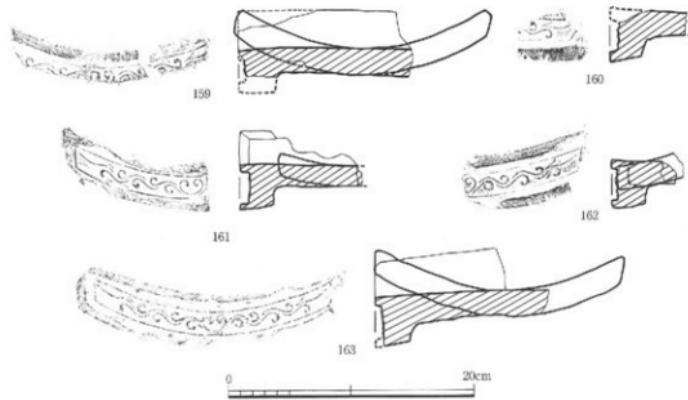


第48図 軒丸瓦
9類実測図

〔軒平瓦〕

軒丸瓦に見たように大半の文様が唐草文様であることには大きな差はないが、その文様の厚さや表現の強弱などで大きく異なるものがあり、軒丸瓦とは異なった展開を見せる。しかし基本的には3種類程度の文様が主体を占めており、他の文様は量的に少なく、軒丸瓦と近似する傾向を示す。

軒平瓦 1類（第49図、図版20）

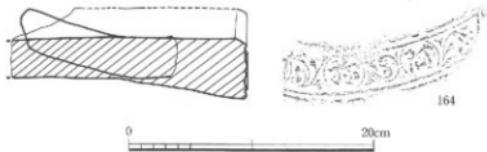


第49図 軒平瓦 1類実測図

S X1、SK 5・6から出土した。最も出土量の多く見られる軒平瓦である。図化できたものは5点（159~163）である。平行する細い凸線2条によって形成されている。軒丸

瓦 1 類とセットをなすと考えられる。復元瓦当幅21.0cm、同厚さ4.0cmをはかる。内区文様は1条の凸線で形成された中心飾りと、その左右三巻の均整唐草文様からなる。その文様の周囲を四方向に細い凸線が囲んでいる。脇、上下の外区には文様や空間は見られない。なお瓦当表面には大量の離れ砂が認められる。周縁は幅1.0~0.8cm、同高さ0.5cmをはかる。平瓦と瓦当の接合は最上部に平瓦を深く喰いこませるもので、頸は段頸をなす。頸の幅は、2.6~3.0cm、高さは1.3cm前後をはかる。平瓦は厚さ2.3cmで内外面共にナデ調整が行われている。外面に離れ砂を認める。焼成良好堅緻で、胎土はやや粗で白色砂粒を多く含む。

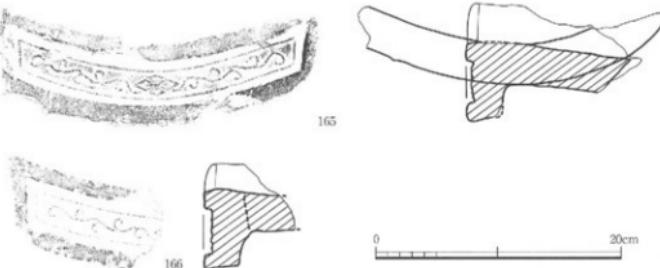
軒平瓦 2 類（第50図、図版20）



第50図 軒平瓦 2 類実測図

最も出土量の少ない軒平瓦である。図化できたものは1点である。やや肉厚の凸線によって形成されている。軒丸瓦9類とセットをなす可能性がある。復元瓦当幅14.0cm、同厚さ5.2cmをはかる。内区文様は凸線で形成された葡萄唐草文様の中心飾りと、その左右二巻の左方向への偏行唐草文様からなる。各葡萄唐草文の間に圈文で囲まれた文字が配置されている。その文字は、右から「阿」「弥」とあり、さらに左側の文字は失われている。おそらく「陀」「仏」の文字が配置されていたものと考えられる。その文様の周囲を四方向に比較的細い凸線が囲んでいる。脇、上下の外区には文様や空間は見られない。周縁は幅0.5cm、同高さ0.2cm前後とほぼ文様の高さと同じである。平瓦と瓦当の接合はとくに平瓦を深く喰いこませるものではなく、平瓦先端までに徐々に厚みを加え、先端に文様を施すものである。頸は曲頸をなす。平瓦部分は内面には布目痕跡が明瞭に残され、外面にはナデ調整が行われている。焼成はやや甘く軟質で、胎土はやや粗である。

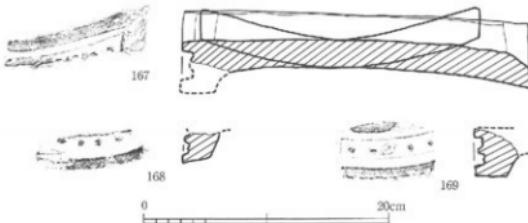
軒平瓦 3 類（第51図、図版20）



第51図 軒平瓦 3 類実測図

S K2・5、S X1から出土した。出土量の少ない軒平瓦である。図化できたものは2点(165・166)である。平行する細い凸線1条によって形成されている。軒丸瓦2類とセットをなすと考えられる。瓦当幅26.0cm、同厚さ6.7cmをはかる。内区文様は凸線で形成された四菱花文の中心飾りと、その左右二巻半の均整唐草文様からなる。その文様の周囲を四方向に細い凸線が囲んでいる。脇、上下の外区には文様や空間は見られない。周縁は幅1.0~1.5cm、同高さ0.6cmをはかる。平瓦と瓦当の接合は最上部に平瓦を深く喰いこませるもので、頸は段頸をなす。頸の幅は2.6~3.0cm、高さは2.7~3.0cm前後をはかる。平瓦は厚さ3.2cmで内外面共にナデ調整が行われている。焼成良好堅緻で、胎土はやや粗である。なお当該瓦は瓦当面からわずかな部分で斜めに切られており、屋根の角、先端部に持ちられた道具瓦の一つであったと見られる。

軒平瓦4類(第52図、図版20)



第52図 軒平瓦4類実測図

S B4、S D1・S X1から出土した。出土量の比較的多く見られる軒平瓦である。図化できたものは3点(167~169)である。軒丸瓦6類とセットをなすと考えられる。復元瓦当幅23.0cm、同厚さ4.8cmをはかる。内区文様は径0.5cmをはかる珠文で形成された連珠文様からなる。その文様の周囲を上下二方向に細い凸線が囲んでいる。なおこの凸線は脇では周縁との区別ができない。上下の外区には文様や空間は見られない。周縁は幅1.0cm、同高さ0.6cmをはかる。平瓦と瓦当の接合は最上部に平瓦を先端まで深く喰いこませるもので、頸は段頸をなす。頸の幅は2.5~3.1cm、高さは2.0cm前後をはかる。平瓦は厚さ2.3cmで内外面共にナデ調整が行われている。内、外面に大量の離れ砂を認める。焼成良好堅緻で、胎土はやや粗である。

軒平瓦5類(第53図)

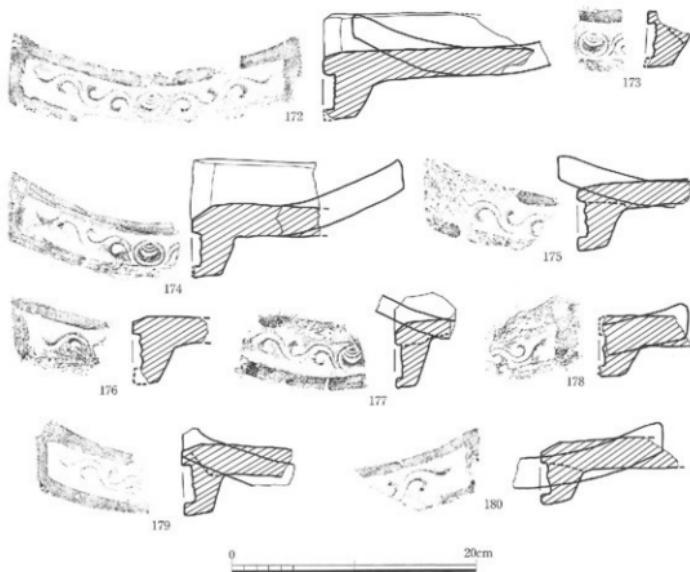
S X1から出土した。全く軒平瓦4類と同じであるといつてよいが、わずかに脇区にまで凸線が及んでいるかどうかという点で異なるものである。図化できたものは2点(170・171)である。軒丸瓦6類とセットをなすと考えられる。内区文様は径0.5cmをはかる珠文で形成された連珠文様からなる。その文様の周囲を上下左右四方向に細い凸線が囲んでいる。上、下、脇の外区には文



第53図 軒平瓦5類実測図

様や空間は見られない。周縁は幅1.0cm、同高さ0.6cmをはかる。平瓦と瓦当の接合は最上部に平瓦を先端まで深く喰いこませるもので、頸は段頸をなす。頸の幅は2.5~3.1cm、高さは2.0cm前後をはかる。平瓦は厚さ2.3cmで内外面共にナデ調整が行われている。

軒平瓦 6類（第54図、図版20）

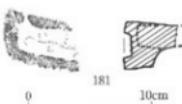


第54図 軒平瓦 6類実測図

SK 2・4・6から出土した。出土量の最も多く見られる軒平瓦の一つである。図化できたものは9点（172~180）である。軒丸瓦4類とセットをなすと考えられる。復元瓦当幅24.5cm、同厚さ7.0cmをはかる。内区文様は肉厚の宝珠文の中心飾りと、その左右二巻の均整唐草文様からなる。脇、上、下の外区には文様や空間は見られない。周縁は幅1.5cm、同高さ1.2cmをはかる。平瓦と瓦当の接合は最上部に平瓦を深く喰いこませるもので、頸は段頸をなす。頸の幅は2.6~3.0cm、高さは4.0cm前後をはかる。平瓦は厚さ3.2cmで内面には布目が残り、外面にナデ調整が行われている。焼成良好堅緻で、胎土はやや粗である。

軒平瓦 7類（第55図）

SK 4・包含層から出土した。最も出土量の少ない軒平瓦の一つである。図化できたものは1点（181）である。文様は細い凸線1条によって形成されている。軒丸瓦とのセット関係は不明であるが4類ないしは5類の可能性がある。



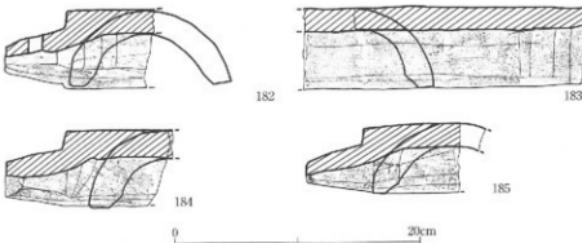
第55図 軒平瓦 7類実測図

る。残存瓦当幅7.5cm、同厚さ5.0cmをはかる。内区文様は1条の凸線で形成された均整唐草文様からなる。周縁は幅1.0~1.2cm、同高さ0.7cmをはかる。平瓦と瓦当の接合は最上部に平瓦を深く喰いこませるもので、頸は段顎をなす。頸の幅は2.6cm、高さは1.5cm前後をはかる。平瓦は厚さ2.0cmで内外面共にナデ調整が行われている。焼成はやや甘く軟質で、胎土はやや粗である。

[丸瓦]

軒丸、軒平瓦に比較して大きな差を読み取りにくい形状のものである。いずれも玉縁を伴う器種で、行基葺と分類される丸瓦は全く確認できなかった。また釘穴を伴う丸瓦はいくつか見られたが、図版の中で示したのはその一部例のみである。

丸瓦1類（第56図）



第56図 丸瓦1類実測図

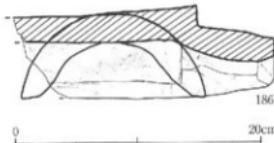
S K 6・S X 1から出土した。比較的小型の丸瓦である。玉縁は丸瓦の上端面とは斜め下方に下がる。玉縁の先端部及び内側にはヘラ削りによる面取り調整が行われている。残存長13.0cm、玉縁長4.5cm、丸瓦の厚さ2.0cmをはかる。丸瓦外面には繩目が残り、さらにナデ調整が見られる。また内面には玉縁裏面から布目が残されている。丸瓦の両端面にはヘラ削り調整が行われている。焼成良好、胎土はやや粗である。

丸瓦2類（第57図）

S X 1から出土した。玉縁は丸瓦の上端面とは斜め下方に下がり、端部近くでさらに下方に曲げられる。玉縁の先端部及び内側にはヘラ削りによる面取り調整が行われている。残存長17.9cm、玉縁長6.0cm、丸瓦の厚さ2.2cmをはかる。丸瓦外面には繩目が密に継方向に残り、さ

らに丸瓦部分外面にナデ調整が見られる。また内面には玉縁裏面から布目が残されている。丸瓦の両端面には、幅の広いヘラ削り調整が行われている。とくに丸瓦内面に離れ砂の痕跡が著しい。焼成良好、胎土はやや粗である。

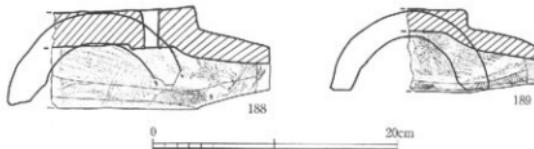
丸瓦3類（第58図、図版21）



第57図 丸瓦2類実測図

S X 1 から出土した。既述の各丸瓦とは、厚さの点で大きく異なるものである。玉縁は丸瓦の上端面とは斜め下方に下がり、半ば近くでさらに下方に曲げられる。玉縁の先端部及び内側にはヘラ削りによる面取り調整が行われている。残存長15.2cm、縁長5.7cm、丸瓦の厚さ3.0cmをはかる。丸瓦外面には薄く縄目が縱方向に残る。これは丸瓦部分外面にナデ調整を施したためであり、本来は2類のように残されていた可能性がある。また内面には玉縁裏面から布目が残されている。丸瓦の両端面には、幅の広いヘラ削り調整が行われている。とくに丸瓦部分に上面から径1.5cm前後の穴が穿たれている。なおこの穴は瓦成形後、焼成前に穿たれたものと見られる。また丸瓦の玉縁と逆方向の先端の状態は、第56図183で見ることができるが、183の外面はヘラナデ調整が行われている。焼成良好、胎土は粗である。

丸瓦 4 類（第59図、図版21）

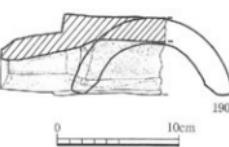


第59図 丸瓦 4 類実測図

S B 4、S X 1 から出土した。既述の丸瓦 1 類に近似する小型の瓦である。玉縁は丸瓦の上端面とは斜め下方に下がる。玉縁の先端部外面及び内側にはヘラ削りによる面取り調整が行われている。残存長13.7cm、玉縁長5.1cm、丸瓦の厚さ2.2cmをはかる。丸瓦外面にはきわめてわずかではあるが縄目の痕跡が残り、さらに縦方向のナデ調整が見られる。また玉縁先端、丸瓦先端に斜めに引張った痕跡が見られる。さらに内面には玉縁裏面から丸瓦裏面に布目が残されている。丸瓦の両端面にはヘラ削り調整が行われている。焼成良好、胎土はやや粗である。

丸瓦 5 類（第60図、図版21）

S X 1 から出土した。比較的小型の丸瓦である。玉縁は丸瓦の上端面とは斜め下方に下がる。玉縁の先端部及び内側にはヘラ削りによる面取り調整が行われている。残存長15.8cm、玉縁長5.1cm、丸瓦の厚さ2.1cmをはかる。丸瓦外面にはナデ調整が見られる。また内面には玉縁裏面から布目が残されている。丸瓦の両端面にはヘラ削り調整が行われている。焼成良好、胎土は粗である。



第60図 丸瓦 5 類実測図

丸瓦 6類（第61図）

S X 1 から出土した。比較的小型の丸瓦である。玉縁は丸瓦の上端面とは斜め下方に下がる。玉縁の基部及び内側にはヘラ削りによる面取り調整が行われている。残存長11.6cm、玉縁長4.5cm、丸瓦の厚さ1.9cmをはかる。丸瓦外面にはナデ調整が見られる。丸瓦内面および玉縁裏面には布目が残されている。丸瓦の両端面にはヘラ削り調整が行われている。焼成良好、胎土は粗である。

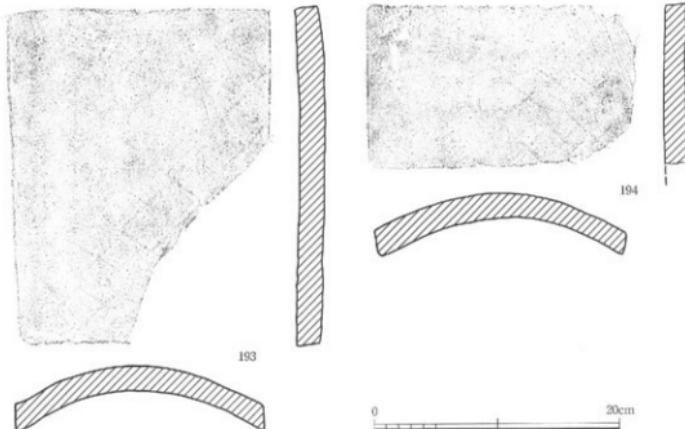
丸瓦 7類（第62図）

S K 6 から出土した。比較的小型の丸瓦である。玉縁は丸瓦の上端面とは斜め下方に下がる。玉縁の基部及び内側にはヘラ削りによる面取り調整が行われている。残存長11.6cm、玉縁長4.5cm、丸瓦の厚さ1.9cmをはかる。丸瓦外面にはナデ調整が見られる。丸瓦内面および玉縁裏面には布目が残されている。丸瓦の両端面にはヘラ削り調整が行われている。焼成良好、胎土は粗である。

〔平瓦〕

丸瓦と同様に軒丸、軒平瓦と比較して大きな差を読み取りにくい形状のものである。大半のものが小型化した段階のもので、ごく一般的な大きさのものは少ない。これらの傾向は軒丸瓦、平瓦及び丸瓦と共通するものである。

平瓦 1類（第63図、図版21）



第63図 平瓦 1類実測図

S K 1・S X 1から出土した。比較的小型の平瓦である。凸面には基本的に6.0cm前後の単位の線格子文様を、全面に施している。その叩き板の幅は9.0×8.0cmの菱形の線刻文様であり、それを全面に、狭端部から広端部に向かって、ほぼ重複させて刻んでいる。凹面には殆ど布目の痕跡は見られず、全面にナデ調整がおこなわれている。また離れ砂の痕跡が著しい。なお瓦の全長は27.6cm、広端部幅20.0cm、厚さ2.2cmをはかる。焼成良好、胎土はやや粗である。

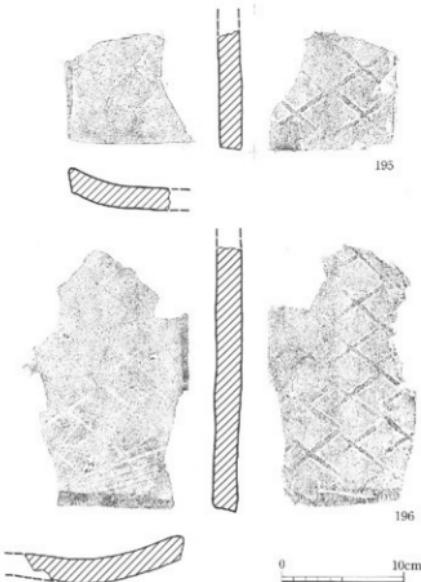
平瓦 2類（第64図、図版21）

S X 1・S K 6から出土した。比較的小型の平瓦で、既述1類とほぼ同じである。凸面には基本的に6.0cm前後の単位の線格子文様を、全面に施している。その叩き板の幅は9.0×8.0cmの×形の線刻文様であり、それを全面に、狭端部から広端部に向かって、やや不規則に刻んでいる。凹面には殆ど布目の痕跡は見られず、全面にナデ調整がおこなわれているが、凸面の文様が印刻されて見られる。おそらく乾燥前の段階で重ねたことにより生じたものであろう。また離れ砂の痕跡が著しい。なお瓦の残存長21.4cm、残存幅13.1cm、厚さ2.2cmをはかる。焼成良好、胎土はやや粗である。

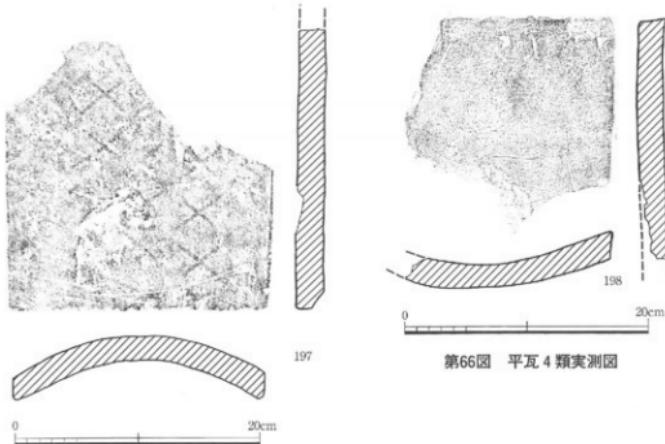
平瓦 3類（第65図、図版21）

S K 6から出土した。比較的小型の平瓦である。凸面には基本的に5.0cm前後の単位の線格子文様を、全面に施している。その叩き板の幅は9.0×8.0cmの×形の線刻文様であり、それを全面に、狭端部から広端部に向かって、不揃いに叩いているが、上面にナデ調整を行っており、叩きの大半が痕跡となっている。凹面には殆ど布目の痕跡は見られず、全面にナデ調整がおこなわれている。狭端部凹面にはヘラ削りによる面取り調整が行われている。なお瓦の残存長は23.2cm、狭端部幅20.2cm、厚さ2.2cmをはかる。焼成甘く軟質、胎土は粗である。

平瓦 4類（第66図）



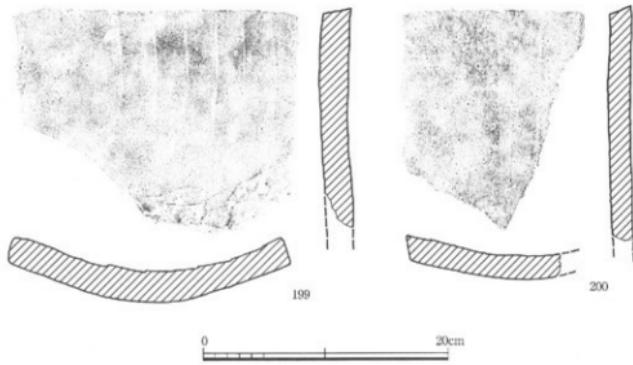
第64図 平瓦 2類実測図



第65図 平瓦 3類実測図

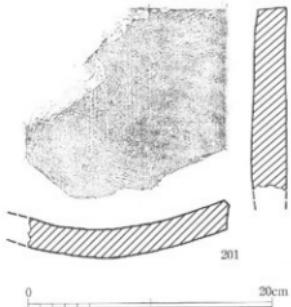
SK 6 から出土した。やや小型の平瓦である。凹凸面ともにナデ調整が行われ、また凹面には殆ど布目の痕跡は見られず、離れ砂の痕跡が著しい。なお瓦の残存長は17.1cm、残存幅 20.2cm、厚さ2.2cmをはかる。焼成良好、胎土はやや粗である。

平瓦 5類（第67図、図版21）

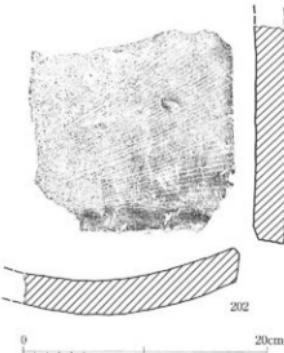


第67図 平瓦 5類実測図

SK 6・SX 1 から出土した。凹凸面ともにナデ調整が行われ、また凹面には卷桶の枠板の痕跡が見られる。ちなみにその枠板幅は2.5cm前後をはかる。凸面には離れ砂の痕跡が著しい。なお瓦の残存長は27.1cm、広端部24.0幅cm、厚さ2.2cmをはかる。焼成やや甘く軟質、胎土はやや粗である。



第68図 平瓦 6類実測図



第69図 平瓦 7類実測図

平瓦 6類（第68図）

S K 6から出土した。やや小型の平瓦である。凹凸面ともに横方向に回転ナデ調整が行われ、また凹面には殆ど布目の痕跡は見られず、離れ砂の痕跡が著しい。なお瓦の残存長は15.5cm、残存幅16.5cm、厚さ2.7cmをはかる。焼成良好、胎土はやや粗で白色砂粒を含む。

平瓦 7類（第69図）

S X1から出土した。凸面には縦方向のナデ調整が行われ、その幅は2.0cm前後をはかる。なお離れ砂の痕跡が著しい。また凹面には布目は斜め方向に引っ張った痕跡が明瞭に残されている。瓦の残存長は15.4cm、残存幅16.3cm、厚さ2.7cmをはかる。焼成良好、胎土はやや粗である。

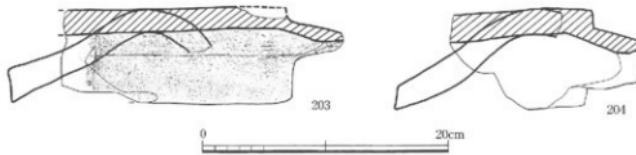
〔道具瓦〕

ここで道具瓦と一括するのは問題があるのかもしれないが、比較的出土量が限られているのでやむをえない。まず雁振丸は、屋根の棟の最上を葺く瓦である。その下方に重ねられ、棟を高く見せるために重ねられる瓦が駆斗瓦である。これは通常は平瓦を分岐あるいは半截して用いられており、当該寺院でもおそらく用いられたであろうが、明確に駆斗瓦と指摘できるものは確認できなかった。

鬼瓦は屋根棟端或いは降棟の先端を飾るものである。当該調査では、合計3点の破片が確認されているが、その全容は復元できない。埴はレンガと同様に敷板あるいは基礎として用いられたものである。時期的には当該遺構、遺物と合致しないが、上限を物語る遺物としては重要であろう。

雁振瓦 1類（第70図203、図版22）

S K 6から出土した。平瓦の中央が山形に膨らみ、その先端部に玉縁を貼付した軒平瓦と丸瓦の中間のような形状をなす瓦である。今回の調査で破片を加えると5点出土してい



第70図 雁振瓦1・2類実測図

る。凹面中央には布目が残り、斜めに引いた痕跡が見られる。その左右の平瓦部分には一部に布目の痕跡が見られるが大半はナデ調整の痕跡しか見られない。凸面には縦方向に網目の痕跡が全体に認められるが、いずれもその上面にナデ調整を施している。玉縁内側にはヘラ削りによる面取り調整が見られる。残存長22.5cm、残存幅15.0cm、玉縁長4.5cm、同残存幅5.7cmを各々はかる。焼成良好、胎土やや粗である。

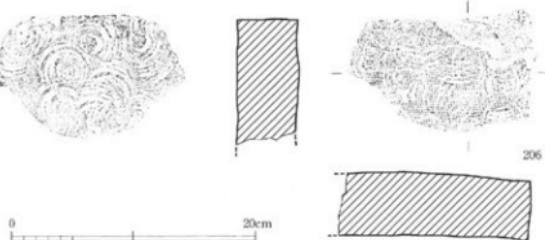
雁振瓦2類（第70図204）

S X 1から出土した。1類と基本的な形状は同じであるが、わずかに当該例のほうが小型である。凹面中央には布目が残り、縦方向に引いた痕跡が見られる。その左右の平瓦部分にも布目の痕跡が見られる。凸面には縦方向にナデ調整を施している。玉縁内側にはヘラ削りによる面取り調整が見られる。残存長11.5cm、残存幅19.0cm、玉縁長3.5cm、同残存幅14.0cmを各々はかる。焼成良好、胎土は粗である。

埠1類（第71図、図版22）

S D 1から出土した。直方体の破片である。上下面には同心円の叩きが施されている。両側面はヘラによる面取り調整が行われている。ちなみに上下面の同心円の半径は3.5cmで両面とも同じ叩き板を使用している。残存長10.0cm×9.5cm、厚さ6.0cmをはかる。焼成良好、胎土は密である。

埠2類（第72図、図版22）

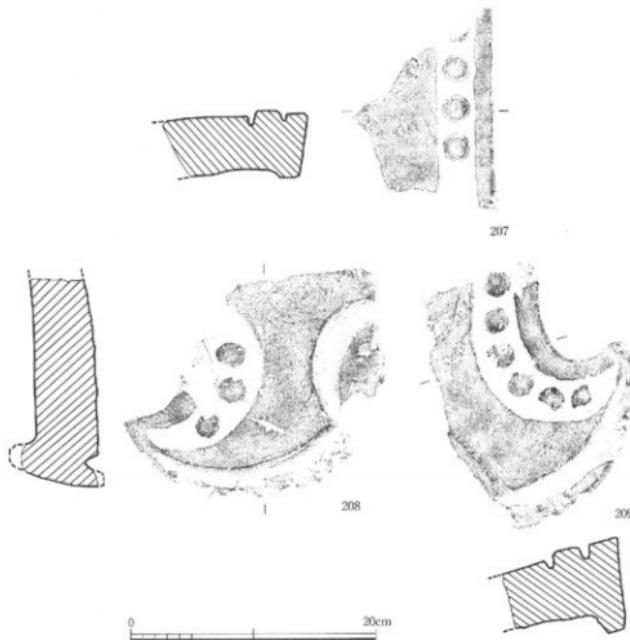


第71図 墟1類実測図

第72図 墟2類実測図

S X 1から出土した。直方体の破片である。上面には同心円の叩き、下面には布目の上に同心円及び円弧の叩きが施されている。両側面はヘラによる面取り調整が行われている。ちなみに上面の同心円の半径は2.3cmで、下面の同心円の半径は1.5cmで、両面で異なる叩き板を使用している。残存長15.5cm×10.0cm、厚さ5.2cmをはかる。焼成良好、胎土は粗で、白色及び黒色砂粒を多く含む。上面には自然釉が認められる。

鬼瓦（第73図、図版22）



第73図 鬼瓦実測図

S K 3・6から出土した。鬼瓦の破片は今回の調査で3点出土している。いずれも鬼瓦の中心部ではなく、両脇の部分である。従って鬼の顔の表情などは明らかではない。また中心部に宝珠文様を伴い、鬼の顔面が見られない場合もある。当該例がそのうちのどれに該当するかは明らかにできない。残存長20.5cm、厚さ6.0cmをはかる。焼成良好、胎土は密である。

(3) 土器類

[土師質皿]

今回の調査で最も多く出土した遺物の一つである。とくに小型の皿が大半を占めており、やや大きい皿が若干量見られたに過ぎない。おそらく生活容器として或いは祭祀用容器としての用途に使用されたものと考えられる。

土師質皿 1 類（第38図、図版15）

S X 1 から出土した。口径8.2～8.6cm、器高1.2～1.5cmをはかる小皿である。圓化できたものは7点（61・64・74・83～85・97）である。底部は浅くほぼ平らで、口縁部は外上方へのび端部は丸い。いずれも手づくねによる成形であり、とくに口縁下位から底部に指オサエの痕跡が見られる。

土師質皿 2 類（第38図）

S X 1 から出土した。口径7.6～7.8cm、器高1.4cm前後をはかる小皿である。圓化できたものは2点（65・70）である。底部は浅くわずかに丸みを持ち、口縁部は外上方へのび端部は丸い。いずれも手づくねによる成形であり、とくに口縁下位から底部に指オサエの痕跡が見られる。

土師質皿 3 類（第38図、図版15）

S X 1 から出土した。口径7.3～7.5cm、器高1.4～1.6cmをはかる小皿である。圓化できたものは8点（59・66・68・75・79・90・98・99）である。底部は浅くわずかに丸みを持ち、口縁部は外上方へのび、端部は丸い。いずれも手づくねによる成形であり、とくに口縁下位から底部に指オサエの痕跡が見られる。

土師質皿 4 類（第38図）

S X 1 から出土した。口径7.0～7.2cm、器高1.5cm前後をはかる小皿である。圓化できたものは2点（56・67）である。底部は浅く平らで、口縁部は外上方へのび端部は丸い。いずれも手づくねによる成形である。

土師質皿 5 類（第38図）

S X 1 から出土した。口径6.6～6.9cm、器高1.5～1.8cmをはかる小皿である。圓化できたものは2点（55・95）である。底部は浅くわずかに丸みを持ち、口縁部は外上方へのび端部は丸い。いずれも手づくねによる成形であり、とくに口縁下位から底部に指オサエの痕跡が見られる。

土師質皿 6 類（第38図）

S X 1 から出土した。口径8.5～9.9cm、器高1.5～1.8cmをはかる小皿である。圓化できたものは2点（57・101）である。底部は浅く平らで、口縁部は外上方へのび、端部は丸い。いずれも手づくねによる成形である。

土師質皿 7 類（第38図）

S X 1 から出土した。口径8.2cm、器高1.4cmをはかる小皿である。圓化できたものはわずか1点（63）である。底部は比較的浅く丸みをもつ。口縁部は外上方へのび、端部は丸い。内外面にナデ調整が行われており、器壁は薄い。

土師質皿 8 類（第38図）

S X 1 から出土した。口径10.0cm以上、器高2.0cm前後をはかる皿である。圓化できたものは3点（104～106）である。底部は浅く平らで、口縁部は外上方へのび、端部は丸い。いずれも手づくねによる成形である。

〔土師質土釜〕

土釜 1 類（第37図54、図版17）

S K 6 から出土した。復元口径20.1cm、残存高5.8cmをはかる土釜（44）である。口縁部はわずかに内傾して段をなして上内方にのび、端部は内傾する凹面をなす。突帶はほぼ水平にのびており、体部はなだらかに内下方に下がる。内面には細かな刷毛目が施されている。また突帶下方から外面には黒色の煤の痕跡がわずかに認められる。また口縁部下位に径0.5cmの小さな穴を穿っている。焼成良好、胎土はやや粗である。

土釜 2 類（第35図44、図版17）

S K 4 層から出土した。復元口径21.1cm、残存高6.4cmをはかる土釜である。口縁部はわずかに内傾して段をなして上内方にのび、端部は内傾する面をなす。突帶はわずかに上方にのびており、体部はなだらかに内下方に下がる。内面にはナデ調整が施されている。また突帶下方から外面には黒色の煤の痕跡がわずかに認められる。焼成良好、胎土はやや粗で白色砂粒を含む。

〔瓦器塊〕

今回の調査で出土した瓦器塊は、合計378点（破片数）と土師質土器に次いで多い遺物である。その形状から、塊と皿、さらに小塊に区分されるが、量的に多いのは皿とされる器種である。この時期、瓦器は塊から皿へと変化が著しい段階であり、底部に見られた高台は形骸化した、形ばかりのものも遂には見られなくなるという特徴をもつ。また内面に見られたヘラ磨きあるいは暗文といわれる手法も、この段階を境として殆ど見られなくなる。

瓦器塊 1 類（第38・39図、図版16）

S X 1 から出土した。口径12.1cm、器高3.2cm、高台径2.5cmをはかる塊（118・121・122～127・134）である。内面にはレコード様圖文がヘラ磨きによって施されている。外面には指オサエの痕跡が残り、暗文、ヘラ磨きや調整などは認められない。底部中央に形骸化した低い高台が擦り付けられるように貼付されている。内外面ともにイブシがかけられている。焼成良好、胎土は密である。

瓦器塊 2 類（第38図、図版16）

S X 1 から出土した。残存高2.2cm、高台径3.9cmをはかる塊（120・123）である。内面にはレコード様圖文が、また底部内面には平行文がヘラ磨きによって施されている。外面には指オサエの痕跡が残り、暗文、ヘラ磨きや調整などは認められない。底部中央に形骸化した低い高台が貼付されている。内外面ともにイブシがかけられている。焼成良好、

胎土は密である。

瓦器塊 3 類（第39図、図版16）

S X 1 から出土した。口径10.5cm、器高2.6cmをはかる塊（133）である。内面にはレコード様圖文がヘラ磨きによって施されている。外面には指オサエの痕跡が残り、暗文、ヘラ磨きや調整などは認められない。底部は浅く丸みを持ち、口縁部はなだらかに内脣して端部にいたる。内外面ともにイブシがかけられている。焼成良好、胎土は密である。

瓦器塊 4 類（第38・39図）

S X 1 から出土した。口径11.5cm、器高2.9cmをはかる塊（111・129・136）である。内面にはレコード様圖文がヘラ磨きによって施されている。外面には指オサエの痕跡が残り、暗文、ヘラ磨きや調整などは認められない。底部は浅く丸みを持ち、口縁部はなだらかに内脣して端部にいたる。外面を指ナデしており、わずかに段をなす。内外面ともにイブシがかけられている。焼成良好、胎土は密である。

瓦器塊 5 類（第37・38図）

S X 1 から出土した。残存高2.1cmをはかる小塊（51～53・112～117）である。内外面には全く文様が見られずナデ調整が施されている。暗文、ヘラ磨きや調整などは認められない。底部は比較的深く丸みを持ち、両端底部に比較的高い高台を貼付する。内外面ともにイブシがかけられている。焼成良好、胎土は密である。

[瓦質土器]

出土量は多くはない。器種としては壺と鉢が見られた。

壺 1 類（第31図、図版17）

S K 2 から出土した。復元口径30.0cm、残存高4.0cmをはかる壺形土器（40）である。口縁端部付近のみの残存である。口縁部は内傾した後、わずかに立ち上がり、端部で丸く仕上げられている。外面には横方向に叩きが施されており、内面には刷毛目調整の痕跡が認められる。焼成甘く軟質、胎土はやや粗である。

壺 2 類（第39図）

S X 1 から出土した。復元口径30.4cm、残存高4.2cmをはかる壺形土器（139）である。口縁端部付近のみの残存である。口縁部は内傾した後、端部で大きく立ち上がり、やや肥厚気味に丸く仕上げられている。外面には横から斜め方向に叩きが施されており、内面にはヘラ削り調整の痕跡が認められる。焼成甘く軟質で、胎土は粗である。

壺 3 類（第23図、図版17）

P 3 から出土した。復元口径35.5cm、残存高5.2cmをはかる壺形土器（37）である。口縁端部付近のみの残存である。口縁部は内傾した後、端部でわずかに立ち上がり、やや肥厚気味に丸く仕上げられている。外面には横から斜め方向に叩きが施されており、内面には刷毛目調整の痕跡が認められる。焼成甘く軟質で、胎土は粗である。

壺 4 類（第35図）

S K 4 から出土した。復元口径35.0cm、残存高4.0cmをはかる壺形土器（45）である。口縁端部付近のみの残存である。口縁部は内傾した後、端部で大きく外方に曲げられ、やや肥厚気味に仕上げられている。外面、内面にはナデ調整の痕跡が認められる。更に内面にはヘラ削り調整の痕跡も見られる。また外面には平行叩きの痕跡が見られる。焼成甘く軟質で、胎土はやや粗である。

鉢（第39図）

S X 1 から出土した。復元口径29.7cm、残存高6.3cmをはかる鉢の上半部分（140）である。口縁部は斜め上方に延び端部で上下に伸ばし外反する面を形成している。体部は半ばより下方は失われている。外面にはヘラ削り、内面にはナデ調整を行っている。焼成甘く軟質、わずかに焼されている。胎土はやや粗である。

〔陶器〕

陶器は他の遺物に比較して出土量は多くはない。また陶器の種類も明らかに備前と推定されるすり鉢、大甕あるいは壺のほかにはごく一部の陶器の破片が見られるのみである。

擂鉢 1 類（第35図）

S K 4 から出土した。復元口径33.0cm、残存高8.0cmをはかる擂鉢（47）である。色調や胎土の状況から備前産と考えられる。内面の条痕は5条1単位で斜めから縱方向に刻まれており、その間隔は粗である。口縁部外面は特徴的な段をなし、端部は内傾する凹面に仕上げられている。焼成良好、胎土は密である。

擂鉢 2 類（第35図、図版17）

S K 4 から出土した。復元口径28.2cm、残存高5.4cmをはかる擂鉢（48）である。色調や胎土の状況から備前産と考えられる。内面の条痕は5条1単位で斜めから縱方向に刻まれており、その間隔は粗である。口縁部外面は特徴的な段をなし、端部は平面に仕上げられている。焼成良好、胎土は密である。

短頸壺（第35図）

S K 4 から出土した。復元口径14.5cm、残存高2.2cmをはかる短頸壺（46）の口縁部の破片である。口縁部は基部から短く直立し、端部は内傾する凸面をなす。体部は口頸基部から大きく広がりながら下方に下がるが上位で欠損。焼成良好、胎土はやや粗である。

〔磁器〕

隣接して市教育委員会が実施した調査で、中世墳墓が検出され、そこから輸入磁器が確認されている。当該遺構群との関係が十分考えられるが、当該調査では磁器の出土は極めて少なく、わずかに3点が採集されたに過ぎない。

青磁碗

P 6 から出土した。残存径3.8×2.2cm、厚さ0.5cmをはかる碗体部の破片である。外面は淡緑色の釉が全面にみられ、その下方に蓮華文が彫刻されているのが見える。色調から見て中国龍泉窯の製品の可能性が濃い。この他にも青磁では細かな破片が見られるが、釉

調が当該例と異なっており、形状も碗ではない。

[その他の遺物]

不明鉄製品

以上、記述してきたほかには、用途不明の鉄製品がS P 2から出土している。この鉄製品は、全面を鏽で被われているが、形態的には立方体をなすものである。遺構面からの出土であり、時期的には各遺物、遺構と平行する段階のものと見てよいだろう。しかし鏽の進行が著しく、その正確な形状の把握ができないため、用途不明鉄製品とせざるを得ない。

壁破片

焼土とほぼ同じ層のS K 6から出土したもので、家屋内の土壁が一部高温で固まったものである。内部にはスサが混じっており、当時の壁塗り手法の一端が理解される。残存径7.8×3.1cm、厚さ8.3cmをはかる。

石材片

近接して調査を実施していた河内長野市調査地域では、弥生時代の遺構が検出されており、当該地域も当然それらの遺跡が波及している可能性があった。しかしそれを想定させる遺物は、サヌカイトの破片がわずかに表面採集されたのみで、関連遺構の確認はできなかった。

(4) 小結

今回の調査で出土した各遺物について、観察結果を記述してきた。これらによって今回どのような遺物が出土したのかは、ほぼ理解いただけたものと考える。これらの遺物が相互に以下に関連し、かつそこから如何なる問題が派生するのか、あるいは解決されるのか等々については、後の考察の章で記述することにし、ここでは遺物の事実報告、観察報告にとどめておきたいと思う。

註1 河内長野市教育委員会、河内長野市遺跡調査会 「大日寺遺跡」2001年

第3節　まとめ

1. 検出遺構から見た大日寺遺跡の変遷

(1) はじめに

大日寺遺跡については当初から寺院跡であるという先入観と或いは弥生時代・古墳時代の遺構が検出されるかもしれないという期待と不安が混在していた。しかし調査の結果は、その当初の期待とは裏腹に、本来の寺院跡ではないかという性格そのものの遺跡の確認となつた。とはいへ今回の調査で確認した遺構は、確實にいくつかの複数の時期に及び、繼

統期間が認められる遺跡であることは疑えない。またその遺構群の変遷も一様ではない。

以下に、その検出遺構及び出土遺物の検討を経た当該遺跡の時期的な変遷について考えてみたい。

（2）遺構の時期的な遷及限界

今回の調査で検出した遺構について、時期的な変遷を簡単に記述すれば次のようになる。まず調査地域の西南部に南北に長い建物が建築されていた。これがS B 1 建物であり、石列が確認されている確実な建物遺構でもある。ここでは軒丸瓦 1 類と軒平瓦 1 類が屋根瓦として使用されていた可能性が濃いが、後述するように別の見方も可能である。

調査対象とした部分に、土坑などを礎石抜き跡として想定した建物 S B 2 建物遺構があつたのかもしれない。またあるいは、現在大日如来を祭る小堂がある部分にかけて建物が存在したのかもしれないが、これらはいずれも推定の域を出ない。

いずれにしてもその建物の屋根に供用されたのは、軒丸瓦 4 類である。さらにこれららの建物が何らかの事情によって取り壊され、東西に蛇行するような道が設定され、南側部分を通るようになる。やがて第二段階の建物が崩壊した時に、それらの建物に供用された瓦などすべてを南側の崖面に石垣を築いて、埋立地とし、寺域の拡張がはかられた可能性がある。この包含層には第二段階の瓦も含まれていることから、その可能性は十分成立する。この拡張後に建物が再び建築されたと考えられる。この建物が、先の S B 2 建物であった可能性もある。

また埋立地にも小さな堂が建築されたのかもしれない。S B 3 建物遺構である。これらの建物が所在していた段階に、調査地域の北部地域では何らかの祭祀が行われた可能性がある。この場合 S B 2 建物遺構は存在していないこともある。またこの建物は瓦葺きでないことも考えねばならない。この時期には既に瓦葺きの建物は、当該調査地域には見られなくなつており、あるいは現在の堂宇のある地に移動されていたのかもしれない。

さらに時期の経過があって、当該地域は全体に水田として開墾された。

以上が、当該調査範囲の地域の変遷である。これを時期別に遺構の共存関係から見ると次のようになろう。

第一段階（12世紀後半頃）

建物（S B 1）が建っていた。 軒平瓦 2 類、磚などの存在から推定される。

第二段階（13世紀～14世紀）

建物（S B 1・2）が2棟建っていたと想定される。軒丸瓦 1 類、軒平瓦 1 類が葺かれた建物が存在したのであろう。

第三段階（14世紀後半～16世紀前半）

S B 1・2・3 など軒丸瓦 4 類が葺かれた建物の存在が想定される。北側地域で祭祀行為が行われたことが出土瓦器、土師器などから推定される。

第四段階（16世紀後半～17世紀初頭）

建物（S B 1など）が崩壊して南側崖面が埋め立てられたと想定される。瓦葺き造構が消滅し、道が造られるたとえられる。この頃石塔が建立される。

第五段階（17世紀半ば以降）

水田として開墾される。堂の移動が完了し現在地に移ったと考えられる。石碑などが建立されたのだろう。

このように推定され段階区分が行なうことができるが、少なくとも第一段階については、遺物の存在が唯一の根拠であり、それらが他所から移入されたものであれば、全くその根拠は失われる。ちなみにそのうちの磚は奈良時代以前まで遡る可能性を持ち、軒平瓦2類については11～12世紀の平安時代に遡る遺物である。今後はこれら遺物の類例収集を行わねばならないが、現状では類例は確認されていない。

第二段階は、当該遺跡での大量出土遺物でもある軒丸瓦1類と軒平瓦1類の葺かれた建物が存在した時期である。それがS B 1建物かS B 2建物かということになる。確実に建物が存在したことを行うかがわせるのは前者である。

ちなみに前者の建物の主軸方向は、N - 9° - Wである。考古地磁気で確認されている永年変化曲線に合わせると、当時の磁石が示す北方と一致している。すなわち当時の磁石の示す方向感覚からいえば、その方向は、ほぼ12世紀半ば前後と推定され、当該建物に先の軒平瓦2類が供用されていたとしても問題はない。

しかし当該建物に近接した部分での調査でも、本例以外の遺物が確認されていないのは問題である。少なくとも瓦葺き建物であれば、基壇の外側に雨落ちがあり、そこに軒瓦の転落が少なくとも見られたはずであるが、それが全くないというのは、不思議ではある。あるいは火災などのため逆方向に建物が崩落した場合も想定され、今後の調査が待たれる。

第三段階は出土瓦の第二段階のものが葺かれた建物が存在する段階である。最初の段階のものとこの段階のものとは、おそらく100年前後しか開いていないと考えられるものであり、ほぼ15世紀までの段階に想定することが可能である。あえていえば河内長野市金剛寺遺跡の調査例から見て、14世紀から15世紀の間に取まる可能性もある。ただしこの時期が必ずしも瓦の廃棄時期ではない。とはいえ、この瓦が葺かれた建物の存続期間も、また他の遺物との対比から見ると相当短くなるのではないかと考えられる。さらにこれらの瓦の多くが、被火していることも重要である。

瓦は高温で焼成されたものではあるが、再び火を受けると脆くなることがある。とくに焼成が弱いものについては、再加熱によってより脆く軟質になることが多いのである。この再加熱によってより脆く軟質になるという状況と出土瓦の状態とは、ほぼ一致している。

すなわち当該遺跡からの焼土の大量の出土と、これら二度焼成の瓦の存在を考えあわせると、当該遺跡の建物が火災によって崩壊したと見ることが可能である。

一方、先の軒丸瓦および軒平瓦の1類瓦については、再加熱によってより脆く軟質になるというような形跡が少ない。即ちこれらについては被火していないことになろう。その理由及び背景は明らかにしえない。しかし当該調査地域の少なくとも最終段階の建物は、火災によって失われた可能性が濃いと考えて大過ないだろう。

これら建物遺構が失われた以降に、埋め立て工事が行われたと見ることができる。とくに第二段階の瓦は、埋め立て部分内部の包含層からの出土量は極めて少ないので若干気にはなるが、皆無ではないことを考えると致し方ないのかも知れない。この埋め立てが何を目的にしたのかは、ここで明らかにするのは困難であるが、少なくとも南側の地形を見る限り崖面であり、傾斜地である。この部分を埋め立てても、あまり多くの土地は確保できないのではと考えるが、果たしてその目的はいかがであったのだろう。

埋め立て工事の前後に調査地には、幅2m前後のやや蛇行する東西道が通じていた。現在も南端を通過する直線の道は、東西を結ぶ近道としての人や車での通行利用が多いが、果たして当時にその道が必要とされたのかどうかについては明らかにしえない。

少なくとも遺構面の上層を道が通じていたということだけは確認できる。この道の存在、及び継続期間も明らかにしえなかつたが、やがて当該地域は水田耕作のために整備されている。この開墾、整備の時期についても明らかではない。しかし当該地域で、近世に分類される遺物の出土が見られないことから、かなり早い段階で水田に転換したと見てよいだろう。

(3) 小結

以上、調査で確認された遺構の変遷をたどってみた。ここでの検討には、資料的な制約から、大きく飛躍した部分も少なからずあり、今後に問題を残すことになった部分もある。常に調査では対象範囲が限定されており、あとわずかな部分の調査で解決を見るという問題も多い。しかし常にその限界は存在するものであり、逆に今後に課題のあるほうが、次に期待がもたれることにもなる。遺構の問題では、時期的遷移がどこまで可能なのかは今後に残された。また近世段階の当該調査地域の検討もまた持ち越す問題となった。いずれも重要な課題であり、今後に期待する。

河内長野市教育委員会鳥羽正剛・太田宏明氏には過去の調査での資料についてのご教示を得た。ここに感謝するものである。

2. 出土遺物から見た大日寺遺跡について

(1) はじめに

発掘調査で数多くの遺物が出土したが、これらのうちで当該遺跡についての性格や状況を推定できるものは果たしてどれだけあったのだろうか。この点に焦点を絞って遺物を考

えてみることにする。

まず遺跡の性格を決定する遺物が出土しているのかという問題がある。それは出土遺物の物量だけではなく、遺物自体の性格等の問題も加味して考える必要がある。また大日寺という当初から遺構の性格を物語る名称が存在しているが、果たしてそれが妥当であるのかどうかも検討の対象に加えねばならない。

(2) 遺跡・遺構の性格の推定

瓦を用いる建物が存在したことは疑いない事実である。しかし古代であれば、瓦の存在＝寺院の存在という図式も成立するかもしれないが、明らかに時期的には中世と呼ばれる期間に分類される。とすると瓦を用いた建物も寺院以外にも多数存在することになる。従って、当該遺跡が寺院という判断には、他の何らかの証明が必要となる。今回の調査で仏教関係の遺物であることを積極的に示すものはきわめて少ないといわざるを得ない。

出土遺物のうち瓦以外の遺物から考えられることについて先に記述しておきたい。それは土器類についてである。これらは日常容器として用いられたことは当然であるが、その他祭祀用に用いられたことが多い遺物である。すなわち、祭祀の実施に伴い、そこで消費された土器は、再び使用することはない。このため高価な焼き物の使用は避けられたはずである。さらに祭祀行為の遂行にあたって内使用を防ぐ方策として、それらを破損することも良く見られる行為である。既に見たように土師質皿は、特定の土坑から大量に出土している。これは瓦器についても同様なことがわかる。

同時に出土している陶質土器の鉢についての観察では内面に明らかに使用痕跡が見られるということである。これは土釜底部に煤が付着していることも併せて、それらの器物が生活に用いられていた可能性を示唆している。さらにそれらの出土遺構は、先の祭祀用と見られた遺物の出土遺構とは異なっている点注目されよう。

すなわち、両者には明らかに遺構の差が見られるのである。その区別とは祭祀用の器物が廃棄されていた場所と生活用品が廃棄されていた場所の差である。さらに想像をたくましくすれば、瓦器の一部は仏具（六器）の代用品として使用された可能性があり、また瓦器の皿についても土釜に収められた状態で出土することも多い。例えば河内長野市金剛寺坊院跡出土例や同市市町西遺跡出土例、同市岩瀬北遺跡出土例、富田林市龍泉寺修法跡出土例など枚挙に暇のないほどである。

このように考えてみると、今回の調査で出土している土師器や瓦器については、仏教関連祭祀との関連が意外と濃いことがわかる。これらから、当該調査遺構内部で祭祀行為が行なわれていた可能性が濃いことが明らかとなった。同時にそこでは、土釜などの使用状況から、煮炊きなどがおこなわれており、生活の痕跡もあったと見られる。

さて出土遺物の多くを占めている瓦についてであるが、これらの中には「阿弥陀仏」と刻まれたものが含まれていることが報告されている。これは古代末期からの浄土教あるい

は末法思想に伴うものであり、明らかに仏教との関係が認められる。残念ながら、当該時期のほかの造構、遺物が確認されなかつたことから、問題もあるが少なくとも仏教関連遺物であることは疑えない。また他の瓦についてみれば、いくつかの連続関係がみとめられ、従って当該遺跡が少なくとも13世紀から15世紀に引き継がれて存在していたことがわかる。このように同じ場所の建物が引き続き保持されているという事実も、当該遺跡が寺院である可能性が高いことを示しているのではないだろうか。

また現在残されている石造遺品との関連も遺跡の性格を考える上で重要である。これらは出土遺物ではないが、明らかに大日寺として一括されて、今まで保存されてきたものである。これらとの関連を抜きにして、当該遺跡は語れないといつても過言ではないだろう。それらの性格にも、明らかに仏教の色彩が濃く認められるものである。

(3) 時期と時期的経過について

瓦器塊・皿については比較的出土資料が多く、また絶対年代との対比も行われてきた。従って、先ずこの瓦器皿群の年代推定からはじめたい。

瓦器塊1類としたものは底部に高台を残す最終段階のものであり、河内長野市三日市遺跡SE03出土例に近似するものである。また尾上実による瓦器 編年ではIV-2と分類されよう。また瓦器 2類としたものについても、高台及び暗文を伴うことなどから、1類より1段階古い三日市遺跡SE456出土例に近似する。なお尾上編年では、III-3からIV-1に相当すると考えられる。さらに瓦器 4類および5類は皿であり、三日市遺跡SX13出土例に近似する。又瓦器 6類は、金剛寺遺跡(KGT88 SX07)出土例に近く、瓦質皿編年試案(以下編年試案とする。)の1類・2類に相当する。

これらから絶対年代を得る手がかりは、金剛寺遺跡出土例に求められるだろう。1988年度に河内長野市が実施した調査で、地山直上で検出された焼土層を切り込んでいるのが確認されている。これらの焼上層は火災によって形成されたものであり、文献上合致する火災は、延元2年(1337)と正平15年(1360)の二件である。とくに1988年調査分の焼土層は1層のみであり、記録にある正平15年焼失の大門に近接していたことから、その年代は正平15年と推定されている。この焼土層に伴って出土した瓦器には編年試案1類に分類された皿がある。

このことから今回出土瓦器の一つの指標として、この編年試案1類に伴う年代として示された正平15年が確認される。また編年試案8類は1409年以降、9類については烏帽子型八幡宮出土鎮壇具に伴う出土例から文明12年(1480)が与えられている。当該遺跡での出土例を見る限り、8、9類の段階まで新しくなるものは見られない。また尾上編年IIIとIVの境は、一応1300年という年代が想定されている。

以上、瓦器塊の検討からは、その存続期間が1300年前後から1400年前後までと想定することが可能であろう。

ところで出土瓦の分析から、本遺跡の建物に供された瓦は、軒丸瓦で9種類、軒平瓦で7種類であることが明らかとなっている。これらのうち軒丸瓦の大半については、いずれも調査区の南端部分に位置するS X 1土坑からの出土である。この土坑は既述の如く埋め戻しの際に一齊に埋められた土砂の中に含まれているものであり、時期的には大日寺供用の廃棄物と見られるものである。このうち軒丸瓦2種のみ整地層での出土が確認されている。さらに3、4、8種についてはS X 1土坑のほかの土坑からの出土が見られるものである。

ところで軒丸瓦のうち、内区と外区の間に圓文を伴い、かつ外区と周縁の間にも圓文を伴うという文様は、軒丸瓦1種、2種、5種、6種、7種であり、3種、4種についてはその文様を伴わない。少なくともこの文様の有無が時期の前後を判断する重要な材料となる。既に遺物の章でも記述したが、これらのうち1種と4種が量的に多く見られるものである。すなわち大日寺の第一段階には1種の軒丸瓦が使用され、第二段階には4種のものが使用されたと考えられるのである。とくに1、4種は量的にも多く、明らかに大日寺の専用品として確保されていた可能性が濃いものである。

一方、軒平瓦での状況を見るならば次のようになる。即ち文様的は軒丸瓦と同様内区文様を凸線が囲むようになっているものが時期的に遅くなるということになる。この見地から見れば、軒平瓦2種は類例外的に古いが、他については1種、3種、4種、5種が該当する。出土地点を見れば、1、4、5種については、いずれもS X 1土坑を含む埋め立て部分が含まれているが、6種については、その遺構部分からのものは含まれていない。またこれら出土軒平瓦の中で比較的文様が古式とされる2種については、S X 1土坑該当地域からの出土であり、先の軒丸瓦の状況と一致する。なお3種については、この原則から外れている。

それらの組み合わせを仮に復元すると軒丸瓦1種は軒平瓦1種とのセット関係が想定され、同様に軒丸瓦4種は軒平瓦6種とのセット関係が想定される。両者の関係が量的な面からも十分想定できるものであるが、この他軒丸瓦1種と軒平瓦4、5種とのセット関係も不可能ではない。また他の軒丸瓦との関係も十分考慮する必要があろう。いずれにしても出土状況から見て先の2セットについては問題がないと考える。

これらを第一段階、第二段階とすると、当該遺跡の建物は大きくは2度の葺き替えが存在した可能性がある。またその第一段階の瓦葺き工事を行った時期は軒丸瓦1種の年代と一致することになり、当然第二段階の場合も葺き替え瓦、軒丸瓦4種の年代と一致することになる。

これらの瓦についての時期を知るためにには類例の検討が必要である。まず時代の特定から考えてみたい。軒平瓦1種のセットに対応するものとしては、大阪四天王寺出土瓦のうち、中門西南出土5-12-88（図録121・聚成430）あるいは六-3-17（聚成454）が近似するが、後者により近いものとして良いだろう。軒丸瓦では、7種に対応するものとして、中

門東北出土六・1・4（図録124、聚成197）が三巴文の方向が逆であるが認められる。ちなみに一部を除いて時代は鎌倉時代に相当するものである。

また調査対象地の近隣地域では、天野山金剛寺第2調査区（KGT95-1）包含層1出土軒丸瓦（遺物番号163）あるいは第5調査区包含層出土軒丸瓦（遺物番号398）が当該調査の軒丸瓦4類に近似する。時期的には15世紀前半頃としている。

また軒丸瓦1、2、4、7類が、軒平瓦1、4類のそれぞれが富田林市龍泉寺出土瓦に同文或いは近似文様のものが見られる。これらはいずれも坊院跡の調査に伴って出土した遺物であり、とくに年代についての明確な資料を伴っているものではない。しかし先に示した四天王寺出土例や当該寺院出土例からいずれも鎌倉時代の範疇に分類して大過ないものである。

平瓦では、平瓦1類、2類に近似する手法のものが龍泉寺南群1号瓦窯跡出土遺物に見られる。龍泉寺南群1号瓦窯跡については、同じ時期に操業していた龍泉寺南群2号瓦窯跡について考古地磁気による年代推定が行われており、AD1210±40年という年代が付与されている。この年代基準は当該叩き文を伴う平瓦の年代の基準としては貴重なものであり、今回調査の大日寺出土平瓦の年代を知る重要な示唆となるだろう。

（4）むすびにかえて

以上、今回の大日寺遺跡調査で出土した遺物、とくに瓦類と土器類によって、その造構群の性格の推定や時期的変遷の基準となる時期の推定について記述を行ってきた。

しかし内容を省みると、資料不足による飛躍や推定の範囲を逸脱したような表現もあり、問題は多く残される。しかし調査で得られた資料に限定や制限があるということはいずれの調査や遺跡でも当然のことかもしれない。仮説というのはあくまで仮説であり、虚説ではない。それが学問の進歩というものによって本来の事実として修正されねばならない。仮説の設定に躊躇し、何らの結論めいたものも出せない調査は少なくとも学術的とはいえない。学問は常にいくつかの説があり、その仮説が壊され、新しい説なり考え方なりが提示されるのである。本稿で示した仮説が、できるだけ速やかに新しく構築され、眞実の大日寺遺跡の歩みが示される日が近からんことを期待しつつ筆を置きたい。

（藤沢）

（参考文献）

- ・中村浩『龍泉寺』1 1981 大谷女子大学資料館ほか
- ・藤沢典彦ほか『中・近世瓦の研究』元興寺篇 1982 元興寺文化財研究所
- ・四天王寺文化財管理室『四天王寺古瓦聚成』1986 柏書房
- ・尾谷雅彦ほか『天野山金剛寺遺跡』1994 河内長野遺跡調査会報Ⅸ 河内長野市遺跡調査会

・中尾智行ほか『天野山金剛寺遺跡』1997 河内長野遺跡調査会報XVI 河内長野市遺跡調査会

なお末尾ながら、河内長野市教育委員会 烏羽正剛・太田宏明氏には過去の調査での資料についてのご教示を得た。ここに感謝するものである。

3. 大日寺と高野街道・烏帽子形城

(1)はじめに

平安時代後半以来、紀伊高野山への参詣が一般化の兆しを見せた。やがて京都の貴族を中心とした高野山詣が急速に活発化してきた。この参詣に利用された道が高野街道であった。いずれも目的地は高野山であったが、その出発点が京都、堺、大阪と異なり、そのため西高野街道、中高野街道、東高野街道と呼ばれた三道が通じていた。しかしそれら三道はともに河内長野市三日市周辺で合流し、一本化している。この道は喜多町の南北を通過し、三日市周辺で合流し河内長野市烏帽子形城の麓を通って、紀見峠を越えて紀州橋本へ至る。

なお元禄5年（1692）の『寺社帳』（『中村重喜家文書』）には喜多村に所在する寺社として「烏帽子形八幡宮、宮寺正保寺、融通念仏宗善福寺、同宗大日寺（無住）」が記載されている。

(2)烏帽子形城の盛衰

烏帽子形城は、石川と天見川の合流地点の南に位置する標高182mをはかる自然地形を利用した山城である。この城に利用された丘陵は北東に伸びており、その先端部に喜多町集落が形成され、今回の調査対象となった大日寺も所在する。さらに高野街道が喜多町の南北を通過していずれもこの烏帽子形城の麓を経由することになっており、当該地域と一体化した形で理解する必要もある地域である。

ともあれその築城の年代は明らかではないが、寿永3年（1184）源行家が長野城にあって義仲に叛乱を起しているが（『平家物語』巻8、室山合戦事）その放地ではないかとも考えられている。南北朝時代の動乱期にあって、地理的にも優位な当該城が重要視されていたことは疑えない。寛正4年嵐山城で敗れ、没落していた畠山義就は再び上洛の機会を得て再興する。その直前大和から河内に入り、升形城を攻略している。『経覚私要鈔』には「押子形城」とあり、これが「烏帽子形城」とされている。この時、義就は金胎寺城に着陣した後、押子形城を攻撃している。

大永4年（1524）には畠山義英方が仁王山城や日野に布陣したのに対し、畠山植長が「エホシカタト云所」へ寄りつめ、まもなく義英は紀州へ敗走した（『後鑑』「祐難記」大永4年12月9日条）とある。このことは16世紀にあって当地が、紀州と河内の交通の要衝

であったことを物語っている。また永禄10年（1567）9月には、根来寺の僧兵が、鳥帽子形城を攻撃し、失敗していることが『多聞院日記』9月15日条に「…昨日十三日河州エホシカタノ城へ、長ヤフノアタリ歟、根来寺衆寄テ散々ニ仕損丁ト云々、首四・五十此表へ來了、追々ニ來了、」とある。この背景には松永秀久方と三好方の争いがある。

またルイス・フロイス『日本史』1581年（天正9）には以下の記載が見られる。

堺から五、六里のところで、河内の国境に鳥帽子形という城がある。周囲に多数の村落や集落を支配するその城は、三人の殿によって管理されており、そのうちの二人はキリストで残りの一人は異教徒であった。………（以下略）

とあるように鳥帽子形城は、南河内地域のキリスト教の中心でもあった。

（3）高野街道、三日市宿

高野街道は和泉・堺からの西高野街道、攝津・平野からの中高野街道、京都から生駒山麓を通る東高野街道がある。平安時代の末期、11世紀になると熊野三山をはじめ、高野山金剛峰寺への信仰がたかまり、それぞれの地への参詣が平安貴族の間で盛んになっていった。高野山金剛峰寺は正暦5年（994）に火災によって全山伽藍建物などの多くが消失したが、まもなく多くの人々の喜捨によって長久元年（1040）には立派に再建されている。永承3年（1048）には関白藤原頼通、永保元年（1081）には摂政京極師実、寛治2年（1088）には白河上皇がそれぞれ高野山に参詣している。白河上皇にいたっては都合、四度の参詣をおこない、そのたびに膨大な土地・荘園・金品が寄進された。

やがて鎌倉時代に入り、武士や一般庶民まで、高野山参詣の習慣が広がり、山に墓所を設置したり、納骨を行う人々も増加していき、その交通路としての高野街道は著しくにぎわったと考えられる。またこの街道のうち宿場町としては、京都と高野山への急速地として三日市宿が栄えたという。

この三日市の成立についての資料は、全く残されていない。『大阪府全誌』古野の項に「伝え云う、（古野）は往時は繁盛の所にして、後、駅場となり來たりしが、今を距る四百余年前、大火のため全村焼失せしを以て、一時、駅を今の三日市に設けしより復た返らず。」とあるが、これについては「確証はない」とする山口之夫氏の見解に従いたい。

三日市宿は二五人・二五匹の宿場で、鳥帽子形八幡宮にある高札に「此外の伝馬道は、二五人・二五匹に限るべし」とあることからも三日市が宿駅であったことが知られる。また火事が多いことも特徴として挙げられている。元禄10年（1698）2月26日には21軒の民家が、同年10月14日の火事では人家15軒、さらに宝永元年（1704）9月22日には34軒、また宝曆12年正月28日にも大火があったという。なお宿場は三日市だけでなく、北側地域の上田にも宿場が存在し、三日市宿の人馬の1/3の負担をさせられていた。いずれにしても高野街道は繁榮していたというが、その通過旅客数などは精確には伝えられていない。

やがて近世後半には、高野街道は紀伊加太からの航路など別ルートの交通路が設置され

したことから、高野街道の荷物や旅行客の通行量が大きく減少し、三日市宿の困窮の原因となつていったという。

(4) むすびにかえて

喜多村の大日寺に関しての記録は、これら街道の歴史の中には全く認められない。しかし古代以来、街道にそって設置されていた寺院が、そこを通行する人々に対して与えた影響や恩恵の数々は計り知れないものがあったと考えられる。大日寺跡の調査成果からは、これらの部分は全く見えてこないが、その地理的な関係から見ると全く無関係に存在していたとは考えがたいのである。かつて河内長野市教育委員会が調査した千早口駅南遺跡で確認された寺院跡の場合は、近世まで継続していた痕跡が明瞭であり、明らかに高野街道の隆盛と共にその歴史が展開されてきたと見られる。しかし当該寺院の場合には、近世という時代の痕跡は調査対象地では、全く確認できず、わずかに石造遺品の調査から寺院の存在を推定できるという程度である。

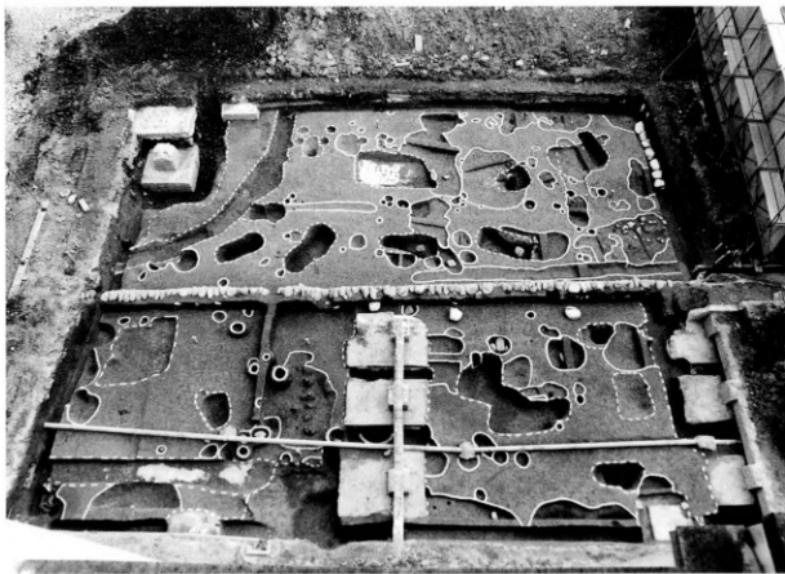
古代末期から中世末期までの河内という地域の激動の時代に存在した地域の小寺院であった大日寺が、或いは地域の事情によってその堂宇の設置場所を交代したのか、或いは火災などの不慮の事故によって、その移動を余儀なくされたのかは明らかにできなかった。

また道との関連で把握できると考えていたが、それについての不十分な状態でしか記述できなかったのは残念である。いずれにしても今回の調査で得られた資料の範囲では限界であるのかもしれない。今後の資料の集収あるいは増加を待って再検討する機会が来ることを望みたい。

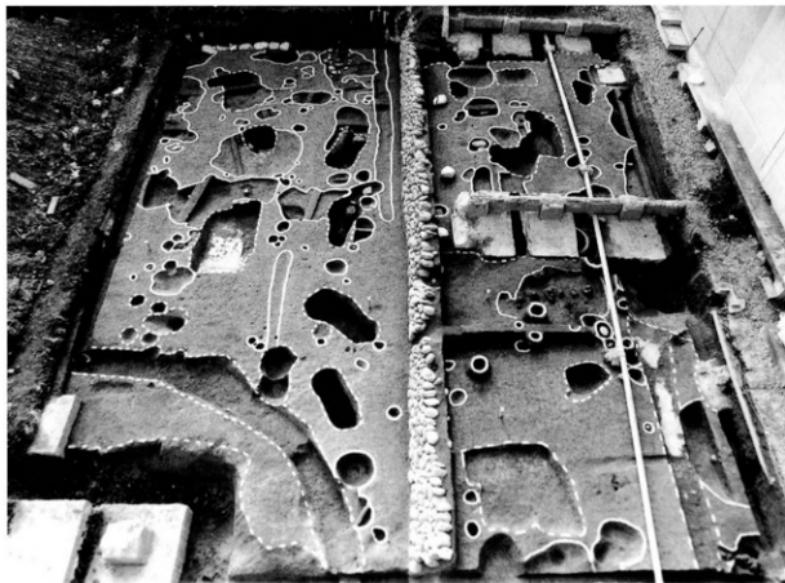
(参考文献)

- ・ 山口之夫外『河内長野市史』第二巻 1998 河内長野市
 - ・ 片上薰・永島福太郎『河内長野市史』第一巻（下） 1996 河内長野市
 - ・ 竹内理三編『続史料大成一多聞院日記二』1978 臨川書店
 - ・ 堀口康生校訂『河内名所団会』1975 柳原書店
- 河内長野市教育委員会鳥羽正剛・太田宏明氏には過去の調査での資料についてのご教示を得た。ここに感謝するものである。

図 版



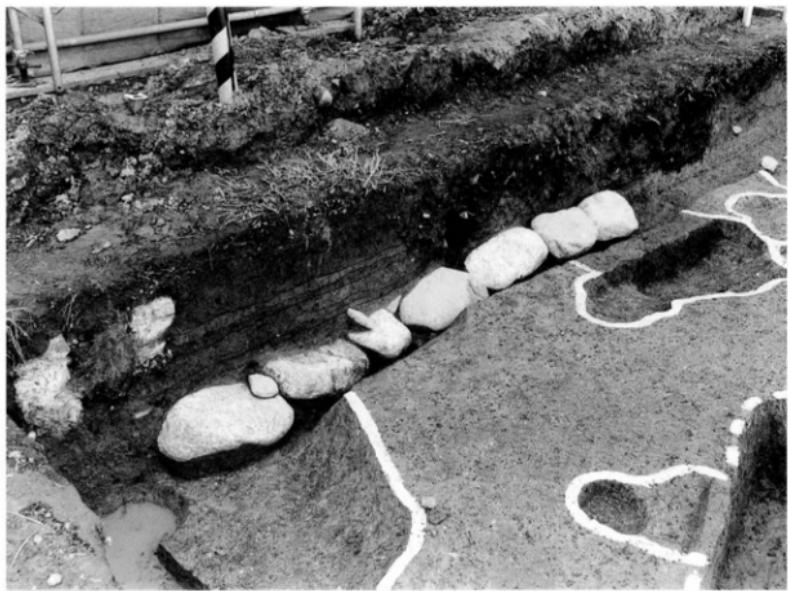
調査区全景（西から）



(北から)



S K 7 遺物出土状況 (南から)



S X 1 (北から)



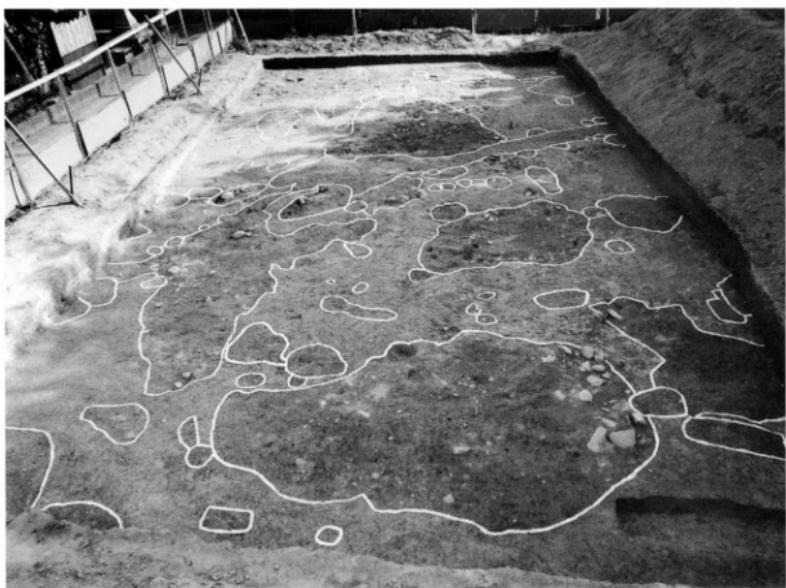
SK1 (5), SK7 (1·3·4), SX1 (10~15)、包含層 (21~31·33)



調査地（北東から）



（南西から）



遺構検出状況（北から）



調査区全景（北から）



東壁土層（北部分）



(南部分)



南壁土層（東部分）



（西部分）



調査区北部分（西から）



調査区南部分（西から）





S E 1 (東から)



S K 2 (西から)



SK 4 (西から)



SK 6 (西から)



S X 1 (東から)



S X 1 東拡張部 (西から)



S X 1 遺物出土状況（北から）



S X 1 埋出土状況



S X 1 遺物出土状況（北から）



S X 1 瓦出土状況



38



74



55



79



58



83



62



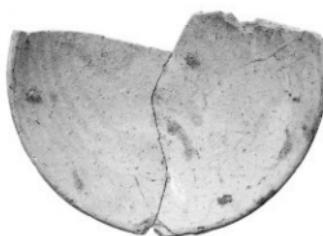
85



68



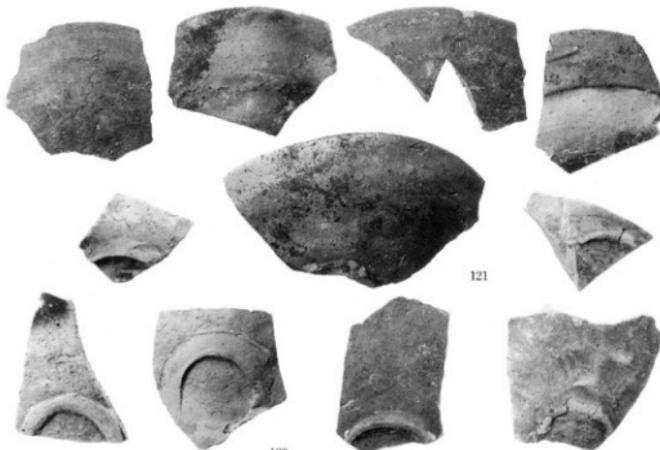
97



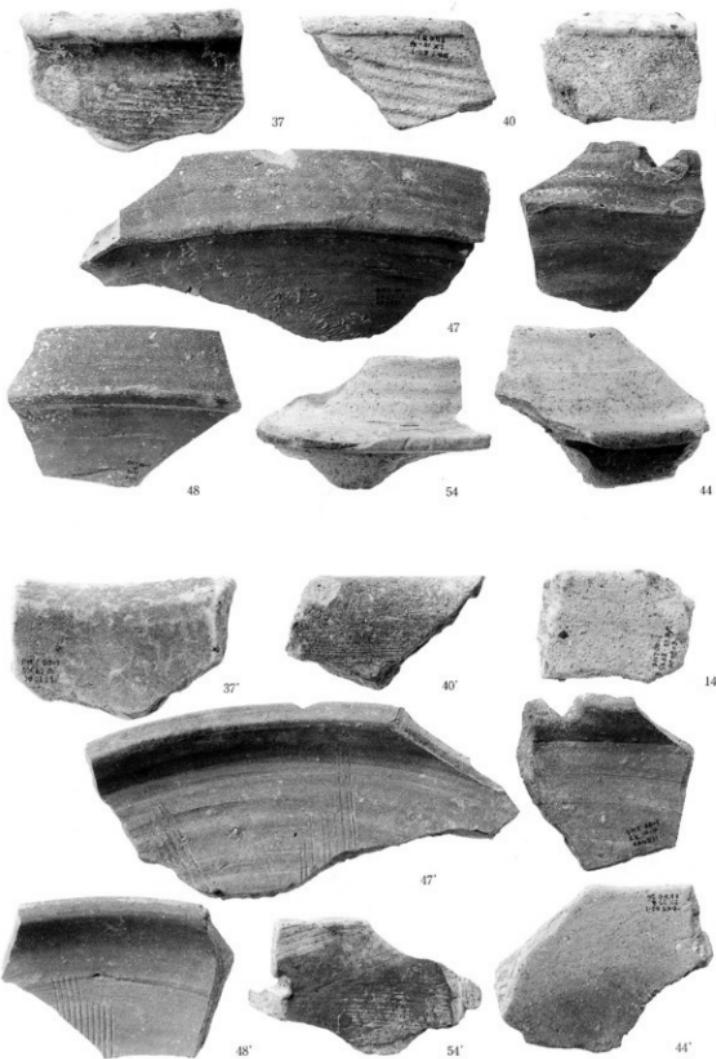
118



133



121



S B 2 (37)、SK 2 (40)、SK 4 (44·47·48)、SK 6 (54)、SX 1 (140)



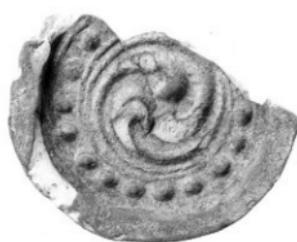
143



144



142



146



147



148



150



154



155



156

S B 2 - P 1 (150)、S K 6 (148)、S X 1 (146・147・154~156)



165



172



161



174

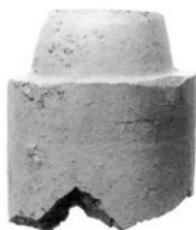


169



164

S B 2 - P 2 (165・172)、S B 4 (169)、S K 6 (174)、S P 1 (164)、S X 1 (161)



190



188



187



197



193



196



199

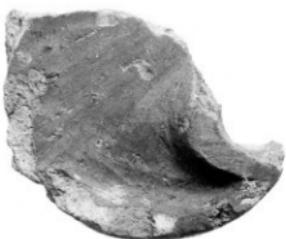
S D 1 (197)、S K 6 (193)、S X 1 (187·188·190·196·199)



203



209



208'



208



205'



206



205'



206

S D 1 (205)、S K 3 (208·209)、S K 6 (203)、S X 1 (206)

報告書抄録

ふりがな	だいにちじいせき
書名	大日寺遺跡
副書名	河内長野市遺跡調査報告XXVI
シリーズ名	河内長野市遺跡調査報告
シリーズ番号	XXVI
編著者名	尾谷雅彦 太田宏明 藤原哲 中村浩 藤澤典彦
編集機関	河内長野市教育委員会 河内長野市遺跡調査会 大谷女子大学博物館
所在地	〒586-8501 大阪府河内長野市原町396-3 TEL 0721-53-1111
発行年月日	2001年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ダイニチジイセキ 大日寺遺跡 DNT93-1	オオハサカワタタギノ 大阪府河内長野市 キタタツイ 喜多町	27216	府115 河86 42"	34°2' 6' 24"	135° 34' 24"	1993.11.25 1993.12.24	238m ²	関西電力長 野変電所拡 張工事
ダイニチジイセキ 大日寺遺跡 DNT00-1	オオハサカワタタギノ 大阪府河内長野市 キタタツイ 喜多町	27216	府115 河86 42"	34°2' 6' 24"	135° 34' 24"	1993.11.25 1993.12.24		喜多町集会 所建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大日寺遺跡 DNT93-1	社寺	弥生～近世	溝	弥生土器 中世土器	
DNT93-1	社寺	弥生～近世	溝 掘立柱建物	瓦	

河内長野市遺跡調査報告書 XXVI
大日寺遺跡

2001年3月31日発行

発 行 大阪府河内長野市原町396-3
河内長野市教育委員会
河内長野市遺跡調査会
0721-53-1111
印 刷 (株)中島弘文堂印刷所

